

令和5(2023)年度

渋谷区立松濤美術館

THE SHOTO MUSEUM OF ART

年報 第27号 / 紀要 第2号

ANNUAL REPORT No.27 / BULLETIN No.2



撮影:上野則宏

令和5(2023)年度

渋谷区立松濤美術館

THE SHOTO MUSEUM OF ART

年報 第27号 / 紀要 第2号

ANNUAL REPORT No.27 / BULLETIN No.2

目次

年報 第27号

I 施設概要	003
II 展観	005
令和5(2023)年度	005
III 展覧会カタログ・関連書籍 等	039
IV 館蔵品貸出状況	042
V 教育普及	043
1. 講演会	043
2. 美術教室	043
3. コンサート	044
4. ギャラリートーク	044
5. 展覧会関連イベント	045
6. 建築ツアー	046
VI 入館状況	047
VII 日誌抄	048
VIII 組織	049
IX 利用案内	050

紀要 第2号

研究ノート1

あこガレのエミール・ガレ

—戦後日本における「日本人のガレ好き」と社会的背景:再考

野城今日子(渋谷区立松濤美術館 学芸員) 052

研究ノート2

ラスキン、野々宮君、黒田清輝の雲の話

—『空の発見』展余話—

平泉千枝(渋谷区立松濤美術館 学芸員) 058

I 施設概要

建物概要

位 置	東京都渋谷区松濤二丁目14番14号
建物構造	鉄筋コンクリート造 地下2階地上2階建
敷地面積	1,034.57㎡
建築面積	618.40㎡
延床面積	2,027.18㎡
階層別面積	塔屋 29.48㎡ 2階 461.20㎡ 1階 305.50㎡ 地下1階 623.95㎡ 地下2階 607.05㎡
建築着工	昭和53（1978）年12月21日
竣 工	昭和55（1980）年 5月 8日
建築工事	株式会社 竹中工務店
設 計	白井晟一研究所
開 館	昭和56（1981）年10月 1日

各室面積

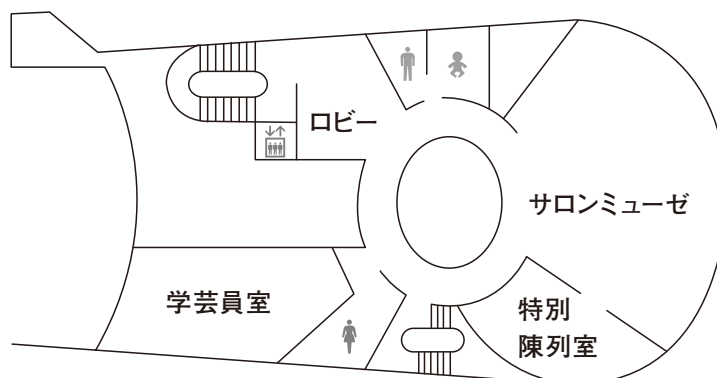
[2階]	特別陳列室	30.00㎡
	サロンミュージゼ	148.00㎡
	館長室	41.00㎡
	学芸員室	43.50㎡
[1階]	ロッカー室	11.50㎡
	ギャラリー	35.00㎡
	事務室	58.00㎡
	ロビー	64.50㎡
[地下1階]	陳列室	203.00㎡
	荷解室	15.50㎡
	格納室	28.50㎡
	収蔵庫	78.50㎡
	機械室	34.50㎡
	倉庫	10.00㎡
[地下2階]	ホール	121.00㎡
	映写室	6.50㎡
	第一制作室	37.00㎡
	第二制作室	34.50㎡
	講師控室	18.50㎡
	機械室	94.00㎡

平面図

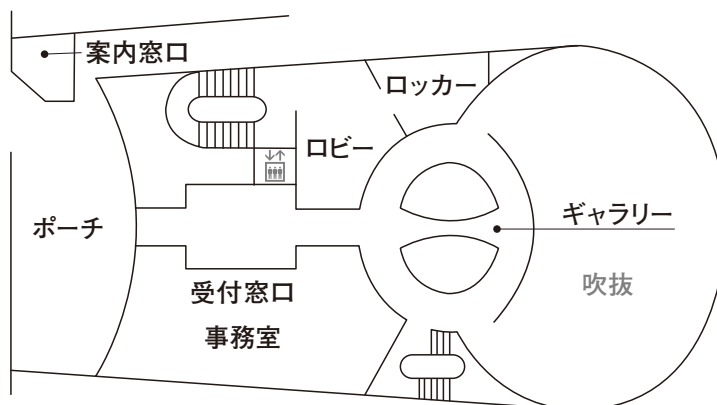
凡例



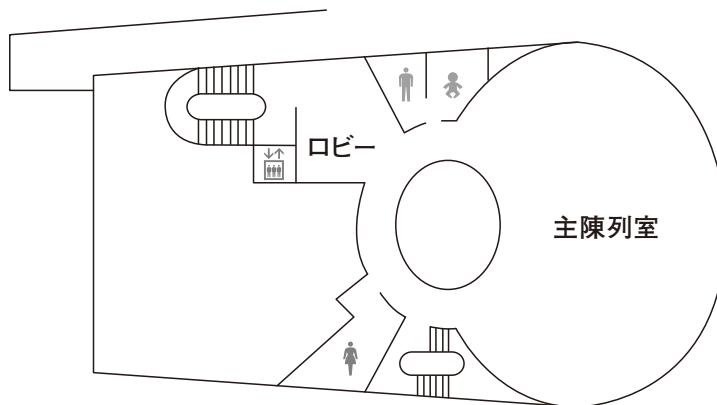
2 階



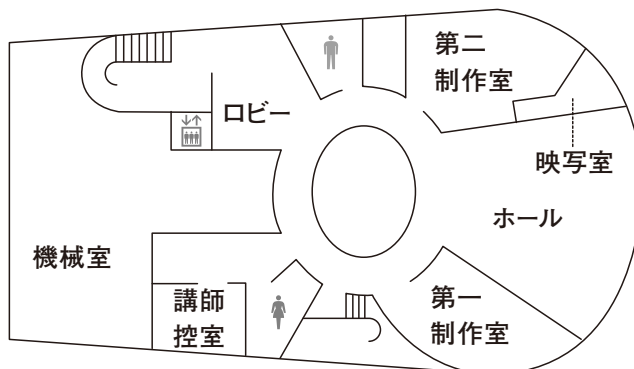
1 階



地下 1 階



地下 2 階



Ⅱ 展観

令和5(2023)年度

特別展『エドワード・ゴッリーを巡る旅

Journey to the World of Edward Gorey』…………… 006

特別展『私たちは何者？ ボーダレス・ドールズ

The Infinite World of Japanese Dolls: From Religious Icons to Works of Art』…………… 013

特別展『杉本博司 本歌取り 東下り

HIROSHI SUGIMOTO HONKADORI AZUMAKUDARI』…………… 019

特別展『「前衛」写真の精神:なんでもないものの変容 瀧口修造・阿部展也・大辻清司・牛腸茂雄

The Spirit of Avant-Garde Photography: Transforming “Nothing Much” TAKIGUCHI Shuzo, ABE Nobuya, OTSUJI Kiyoji, GOCHO Shigeo』…………… 023

2024 松濤美術館公募展

2024 Shoto Museum of Art Exhibition of Works by the General Public …………… 035

サロン展『渋谷区立松濤美術館所蔵 土地の記憶と記録 風景を巡る旅

Salon Exhibition “The Shoto Museum of Art Collection, Memories and Records of Places: The Journey through the Scene”』…………… 036

令和5(2023)年度

特別展

エドワード・ゴアリーを巡る旅

Journey to the World of Edward Gorey

会期＝令和5(2023)年4月8日(土)～6月11日(日)

※会期中、一部展示替え

会場＝地下1階主陳列室、2階サロンミュージゼ、特別陳列室

主催＝渋谷区立松濤美術館

特別協力＝エドワード・ゴアリー公益信託、ゴアリーハウス(ケープコッド)

協力＝株式会社 河出書房新社

企画協力＝株式会社イデッフ

絵本作家エドワード・ゴアリー(Edward Gorey, 1925～2000年)は、日本においては2000年以降『うろんな客』『不幸な子供』などの絵本が次々と翻訳・紹介され、多くのファンを獲得している。ゴアリーは自身がテキストとイラストの両方を手がけた主著(Primary Books)以外にも、挿絵、舞台と衣装のデザイン、演劇やバレエのポスターなどに多彩な才能を発揮した。本展は、作家の終の棲家に作られた記念館・ゴアリーハウスで開催されてきた企画展から、約250点の作品で再構成し、ゴアリーの芸術を紹介するもの。

会場では第Ⅰ章「ゴアリーと子供」、第Ⅱ章「ゴアリーが描く不思議な生き物」、第Ⅲ章「ゴアリーと舞台芸術」、第Ⅳ章「ゴアリーの本作り」、第Ⅴ章「ケープコッドのコミュニティと象」の5章立てで、原画を中心に、絵本、バレエ関係のデザイン、愛用の道具、晩年の版画等を紹介した。このなかで、ゴアリーのモチーフを取り入れた日本のファッションブランドUNDERCOVERの衣装1点も展示したほか、2階エレベーターホールでは、本展のために作成されたゴアリーをめぐる短編ドキュメンタリーを放映した。またB1階に原画展示にあわせて絵本『不幸な子供』『狂瀾怒濤』の絵本、2階のソファ周辺には出展原画に関連する全絵本を設置し、読書コーナーをつくった。

本展は20代～30代を中心に予想を上回る反響があり、来館者数はこの時点における開館以来の最高を記録した。

また開催に際し、ゴアリーの邦訳のほとんどを手がけてこられた柴田元幸氏による記念講演会、ギャラリー・トークなどの関連イベントを開催した。



出品目録

- ・作家名エドワード・ゴーリーについては省略しました
- ・所蔵表記のEGCT= The Edward Gorey Charitable Trust、EGH= The Edward Gorey House、I.D.F.= 株式会社イデップ
作品番号に付された「参考」=参考作品、「B」=書籍作品をそれぞれ示しています。
- ・★は前期展示 4 / 8 ~ 5 / 7 ☆は後期展示 5 / 9 ~ 6 / 11

No.	タイトル	内容・出版社	制作年	材質・技法	所蔵	展示替
第Ⅰ章 ゴーリーと子供						
1-1	[ひよこ]	子供時代のドローイング	1930	鉛筆、色鉛筆、紙	EGCT	
1-2	[うさぎ(おかあさんとおとうさんへ テッドより)]	子供時代のドローイング	1930年代前半	鉛筆、色鉛筆、紙	EGCT	
1-3	[音楽を奏でる3匹のねこ]	子供時代のドローイング	1935頃	鉛筆、色鉛筆、紙	EGCT	
1-4	みななもの、聞け(ランプを持つねこ)	子供時代のドローイング	1935頃	鉛筆、色鉛筆、紙	EGCT	
1-5	野良ねこ	青年時代のドローイング(手紙付き)	1938	鉛筆、紙	EGCT	
1-6	[ボウルをかき混ぜるねこ]	青年時代のドローイング(手紙付き)	1930年代後半	インク、色鉛筆、紙	EGCT	
1-7~23	魔の手	青年時代の本(表紙の付いたポートフォ リオに入った22枚のドローイング)	1930年代後半	インク、色鉛筆、紙	EGCT	
1-8	不幸な子供	挿絵・原画	1957	ペン、インク、紙	EGCT	
1-9	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-10	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-11	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-12	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-13	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-14	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-15	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-16	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-17	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-18	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-19	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-20	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-21	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-22	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-23	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-24	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-25	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-26	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-27	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-28	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-29	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-30	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-31	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-32	不幸な子供	挿絵・原画	1959	ペン、インク、紙	EGCT	
1-33	恐るべき赤ん坊	挿絵・原画	1953	ペン、インク、紙	EGCT	
1-34	恐るべき赤ん坊	挿絵・原画	1953	ペン、インク、紙	EGCT	
1-35	恐るべき赤ん坊	挿絵・原画	1953	ペン、インク、紙	EGCT	
1-36	恐るべき赤ん坊	挿絵・原画	1953	ペン、インク、紙	EGCT	
1-37	ギャシュリークラムのちびっ子たち	挿絵・原画	1960	ペン、インク、紙	EGCT	
1-38	ギャシュリークラムのちびっ子たち	挿絵・原画	1960	ペン、インク、紙	EGCT	
1-39	敬虔な幼子	挿絵・原画	1964	ペン、インク、紙	EGCT	
1-40	敬虔な幼子	挿絵・原画	1964	ペン、インク、紙	EGCT	
1-41	敬虔な幼子	挿絵・原画	1964	ペン、インク、紙	EGCT	
1-42	敬虔な幼子	挿絵・原画	1964	ペン、インク、紙	EGCT	
第Ⅱ章 ゴーリーが描く不思議な生き物						
2-1	うろんな客	挿絵・原画	1955頃	ペン、インク、紙	EGCT	
2-2	うろんな客	挿絵・原画	1955頃	ペン、インク、紙	EGCT	
2-3	うろんな客	挿絵・原画	1955頃	ペン、インク、紙	EGCT	
2-4	うろんな客	挿絵・原画	1955	ペン、インク、紙	EGCT	
2-5	蟲の神	挿絵・原画	1961	ペン、インク、紙	EGCT	
2-6	蟲の神	挿絵・原画	1961	ペン、インク、紙	EGCT	
2-7	蟲の神	挿絵・原画	1961	ペン、インク、紙	EGCT	

No.	タイトル	内容・出版社	制作年	材質・技法	所蔵	展示替
2-8	蟲の神	挿絵・原画	1961	ペン、インク、紙	EGCT	
2-9	ブラックドール	キャラクターデザイン	1973頃	ペン、インク、紙	EGCT	
2-10	ブラックドール	キャラクターデザイン	1973頃	ペン、インク、紙	EGCT	
2-11	ブラックドール	キャラクターデザイン	1973頃	ペン、インク、紙	EGCT	
2-12	ブラックドール	キャラクターデザイン	1973頃	ペン、インク、紙	EGCT	
2-13	ブラックドール	キャラクターデザイン	1973頃	ペン、インク、紙	EGCT	
2-14	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-15	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-16	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-17	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-18	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-19	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-20	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-21	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-22	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-23	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-24	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-25	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-26	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-27	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-28	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-29	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-30	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-31	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-32	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-33	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-34	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-35	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1987	ペン、インク、紙	EGCT	
2-36	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1987	ペン、インク、紙	EGCT	
2-37	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1987	ペン、インク、紙	EGCT	
2-38	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1987	ペン、インク、紙	EGCT	
2-39	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1987	ペン、インク、紙	EGCT	
2-40	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-41	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	挿絵・原画	1986	ペン、インク、紙	EGCT	
2-42	音叉	挿絵・原画	1983	ペン、インク、紙	EGCT	
2-43	音叉	挿絵・原画	1983	ペン、インク、紙	EGCT	
2-44	音叉	挿絵・原画	1983	ペン、インク、紙	EGCT	
2-45	音叉	挿絵・原画	1983	ペン、インク、紙	EGCT	
2-46	音叉	挿絵・原画	1983	ペン、インク、紙	EGCT	
2-47	音叉	挿絵・原画	1983	ペン、インク、紙	EGCT	
2-48	音叉	挿絵・原画	1983	ペン、インク、紙	EGCT	
B-1	『ブラックドール』	ニューヨーク:ゴサム・ブックマート	1973		I. D. F.	
B-2	『フィグバッシュのアクロバット』	ニューヨーク:ファントッド・プレス	1994		I. D. F.	
B-3	『ファントッド・バック』	ニューヨーク:ゴサム・ブックマート	1995		I. D. F.	
第三章 ゴーリーと舞台芸術						
3-1	トウシューズの中にあるニューヨーク・シティ・バレエのネコ		1980頃	ペン、インク、絵具、紙	EGCT	
3-2	ニューヨーク・シティ・バレエ ロゴ・ピンのデザイン		1970年代頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3参考	ニューヨーク・シティ・バレエ 観覧チケット			印刷物	EGH	
3参考	ニューヨーク・シティ・バレエ タオル	グッズ	1970年代頃		EGH	
3-3	具体例のある教訓	挿絵・原画	1957	ペン、インク、紙	EGCT	
3-4	具体例のある教訓	挿絵・原画	1957	ペン、インク、紙	EGCT	
3-5	具体例のある教訓	挿絵・原画	1957	ペン、インク、紙	EGCT	
3-6	具体例のある教訓	挿絵・原画	1957	ペン、インク、紙	EGCT	

No.	タイトル	内容・出版社	制作年	材質・技法	所蔵	展示替
3-7	具体例のある教訓	挿絵・原画	1957	ペン、インク、紙	EGCT	
3-8	具体例のある教訓	挿絵・原画	1957	ペン、インク、紙	EGCT	
3-9	具体例のある教訓	挿絵・原画	1957	ペン、インク、紙	EGCT	
3-10	具体例のある教訓	挿絵・原画	1905/5/10	ペン、インク、紙	EGCT	
3-11	具体例のある教訓	挿絵・原画	1905/5/10	ペン、インク、紙	EGCT	
3-12	具体例のある教訓	挿絵・原画	1905/5/10	ペン、インク、紙	EGCT	
3-13	具体例のある教訓	挿絵・原画	1957	ペン、インク、紙	EGCT	
3-14	具体例のある教訓	挿絵・原画	1957	ペン、インク、紙	EGCT	
3-15	金箔のコウモリ	『バレエ・レビュー』連載の飾りカット	1965頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-16	金箔のコウモリ	『バレエ・レビュー』連載の飾りカット	1965頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-17	金箔のコウモリ	『バレエ・レビュー』連載の飾りカット	1965頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-18	金箔のコウモリ	『バレエ・レビュー』連載の飾りカット	1965頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-19	金箔のコウモリ	『バレエ・レビュー』連載の飾りカット	1965頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-20	金箔のコウモリ	『バレエ・レビュー』連載の飾りカット	1965頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-21	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-22	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-23	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-24	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-25	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-26	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-27	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-28	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-29	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-30	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-31	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-32	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-33	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-34	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-35	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-36	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-37	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-38	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-39	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-40	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-41	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-42	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-43	金箔のコウモリ	挿絵・原画	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
3-44	失敬な招喚	挿絵・原画	1971	ペン、インク、紙	EGCT	
3-45	失敬な招喚	挿絵・原画	1972	ペン、インク、紙	EGCT	
3-46	失敬な招喚	挿絵・未使用	1974	ペン、インク、紙	EGCT	
3-47	薄紫のレオタード あるいは、年がら年中ニューヨーク・シティバレエを観に行くこと	挿絵・原画	1970頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-48	薄紫のレオタード あるいは、年がら年中ニューヨーク・シティバレエを観に行くこと	挿絵・原画	1970頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-49	薄紫のレオタード あるいは、年がら年中ニューヨーク・シティバレエを観に行くこと	挿絵・原画	1970頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-50	薄紫のレオタード あるいは、年がら年中ニューヨーク・シティバレエを観に行くこと	挿絵・原画	1970頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-51	薄紫のレオタード あるいは、年がら年中ニューヨーク・シティバレエを観に行くこと	挿絵・原画	1970頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-52	薄紫のレオタード あるいは、年がら年中ニューヨーク・シティバレエを観に行くこと	挿絵・原画	1970頃	ペン、インク、紙	EGCT	

No.	タイトル	内容・出版社	制作年	材質・技法	所蔵	展示替
3-53	薄紫のレオタードあるいは、年がら年中ニューヨーク・シティバレエを観に行くこと	挿絵・原画	1970頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-54	薄紫のレオタードあるいは、年がら年中ニューヨーク・シティバレエを観に行くこと	挿絵・原画	1970頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-55	蒼い時	挿絵・原画	1974	ペン、インク、紙	EGCT	
3-56	蒼い時	挿絵・原画	1974	ペン、インク、紙	EGCT	
3-57	蒼い時	挿絵・原画	1974	ペン、インク、紙	EGCT	
3-58	蒼い時	挿絵・原画	1974	ペン、インク、紙	EGCT	
3-59	蒼い時	挿絵・原画	1974	ペン、インク、紙	EGCT	
3-60	蒼い時	挿絵・原画	1974	ペン、インク、紙	EGCT	
3-61	蒼い時	挿絵・原画	1974	ペン、インク、紙	EGCT	
3-62	蒼い時	挿絵・原画	1974	ペン、インク、紙	EGCT	
3-63	蒼い時	挿絵・原画	1974	ペン、インク、紙	EGCT	
3-64	無題(妖精のようなバレリーナ)	Ogdred Mude (ゴーリーのアナグラム)によるオリジナル作品	1980年代頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-65	アンコール！(吹き流し)	オリジナル作品	1971	ペン、インク、紙	EGCT	
3-66	アンコール！(マント)	オリジナル作品	1971頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-67	ドラキュラ・トイシアター	表紙・原画	1979頃	インク、水彩、紙	EGCT	
3-68	ドラキュラ・トイシアター	「ドラキュラ伯爵」原画	1979頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-69	ドラキュラ・トイシアター	「第1幕 書庫2」背景画	1979頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-70	ドラキュラ・トイシアター	「第1幕 書庫5」原画	1979頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-71	ドラキュラ・トイシアター	「第3幕2場 壁」原画	1979頃	ペン、インク、紙	EGH	
3-参考	UNDERCOVER 無題(2020年春夏コレクション)	ドラキュラ・モチーフのセットアップ	2020	ジャケット：トリアセテート70%、ポリエステル30% / スカート：シルク100% Silk、部分：ポリエステル100%、裏地：コットン100% / ブラトップ：シルク100% Silk、部分：ナイロン100%	UNDERCOVER CO., LTD	
3-72	ミステリー！	背景画	1980年代前半頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-73	ミステリー！	蔵書票デザイン	1980年代前半頃	ペン、インク、紙	EGCT	
3-74-1~2	ミステリー！	背景画(墓場シーン)	1980年代前半頃	鉛筆、インク、紙	EGCT	
3-75	ミステリー！	背景画(墓場シーン)	1980年代前半頃	インク、水彩、アセテート	EGCT	
B-1	『バレエ・レビュー』5巻、1号	ニューヨーク：ダンス・リサーチ・ファンデーション	1975-1976		EGH	
B-2	『バレエ・レビュー』6巻、2号	ニューヨーク：ダンス・リサーチ・ファンデーション	1977		EGH	
B-3	『バレエ・レビュー』19巻、4号	ニューヨーク：ダンス・リサーチ・ファンデーション	1991		EGH	
B-4	『バレエ・レビュー』20巻、2号	ニューヨーク：ダンス・リサーチ・ファンデーション	1992		EGH	
B-5	『プレイビル』ドラキュラ特集、1977年10月号	ニューヨーク：ダンス・リサーチ・ファンデーション	1977		EGH	
B-6	『プレイビル』ドラキュラ特集、1978年4月号	ニューヨーク：プレイビル	1978		EGH	
B-7	『ドラキュラ・トイシアター』	ニューヨーク：チャールズ・スクリブナーズ・サンズ	1979		I. D. F.	
第IV章 ゴーリーの本作り						
4-参考	ペン、ペン先、画材など				EGCT	
4-1	うろんな客	中表紙・原画	1955頃	ペン、インク、紙	EGCT	
4-2	不幸な子供	表紙・原画	1959頃	ペン、インク、紙	EGCT	
4-3	不幸な子供	裏表紙・原画	1959頃	ペン、インク、紙	EGCT	
4-4	不幸な子供	謝辞	年代不明	ペン、インク、紙	EGCT	☆
4-5	不幸な子供	コピーライト	年代不明	ペン、インク、紙	EGCT	☆
4-6	不幸な子供	書誌	年代不明	ペン、インク、紙	EGCT	☆

No.	タイトル	内容・出版社	制作年	材質・技法	所蔵	展示替
4-7	中国風オペリスク：四つ目のアルファベット	表紙、裏表紙・未使用	1961	ペン、インク、紙	EGCT	
4-8	中国風オペリスク：四つ目のアルファベット	表紙、裏表紙・草稿	1962	ペン、インク、紙	EGCT	
4-9	中国風オペリスク：四つ目のアルファベット	中表紙・草稿	1962	ペン、インク、紙	EGCT	
4-10	中国風オペリスク：四つ目のアルファベット	表紙、裏表紙・原画	1969	ペン、インク、紙	EGCT	
4-11	中国風オペリスク：四つ目のアルファベット	スケッチ(Aは作家Author、散歩に出かけた)	1962	ペン、インク、紙	EGCT	
4-12	中国風オペリスク：四つ目のアルファベット	スケッチ(MはマフィンMuffin、トレイから買った)	1962	ペン、インク、紙	EGCT	
4-13	中国風オペリスク：四つ目のアルファベット	スケッチ(Nは貼り紙Notice、読んでびっくり)	1962	ペン、インク、紙	EGCT	
4-14	中国風オペリスク：四つ目のアルファベット	複製(Aは作家Author、散歩に出かけた)	1961頃	ペン、インク、紙	EGCT	
4-15	恐るべき赤ん坊	表紙・原画	年代不明	ペン、インク、ガッシュ、紙	EGCT	★
4-16	恐るべき赤ん坊	中表紙・原画(1995年Peter Weed発行、ハードカバー版・初版)	年代不明	ペン、インク、紙	EGCT	★
4-17	恐るべき赤ん坊	コピーライト、謝辞	年代不明	ペン、インク、紙	EGCT	★
4-18	恐るべき赤ん坊	タイトル	年代不明	ペン、インク、紙	EGCT	★
4-19	蟲の神	表紙案	年代不明	ペン、インク、紙	EGCT	☆
4-20	蟲の神	中表紙・原画	年代不明	インク、水彩、紙	EGCT	☆
4-21	思い出した訪問：人生から取られた物語	表紙、裏表紙・原画	1964	ペン、インク、紙	EGCT	☆
4-22	思い出した訪問：人生から取られた物語	中表紙・原画	1964	ペン、インク、紙	EGCT	☆
4-23	金箔のコウモリ	表紙、裏表紙・原画	1965頃	ペン、インク、紙	EGCT	
4-24	金箔のコウモリ	表紙カバー	1965頃	インク、アセテート	EGCT	
4-25	金箔のコウモリ	中表紙・原画	1965頃	ペン、インク、紙	EGCT	
4-26	金箔のコウモリ	表紙カバー袖	1965	ペン、インク、紙	EGCT	
4-27	ジャンプリーズ	中表紙・原画	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-28	ジャンプリーズ	謝辞	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-29	ジャンプリーズ	テキスト	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-30	失敬な招喚	表紙・原画	1971	ペン、インク、紙	EGCT	☆
4-31	蒼い時	表紙・原画	1974	ペン、インク、紙	EGCT	☆
4-32	蒼い時	中表紙・原画	1974	ペン、インク、紙	EGCT	☆
4-33	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	表紙・原画	1986	ペン、インク、厚紙	EGCT	
4-34	狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動	裏表紙・原画	1986	ペン、インク、厚紙	EGCT	
4-35	音叉	表紙・原画	1983	ペン、インク、紙	EGCT	★
4-36	ジャンプリーズ	挿絵・原画	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-37	ジャンプリーズ	挿絵・原画	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-38	ジャンプリーズ	挿絵・原画	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-39	ジャンプリーズ	挿絵・原画	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-40	ジャンプリーズ	挿絵・原画	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-41	ジャンプリーズ	挿絵・原画	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-42	ジャンプリーズ	挿絵・原画	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-43	ジャンプリーズ	挿絵・原画	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-44	ジャンプリーズ	挿絵・原画	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-45	ジャンプリーズ	挿絵・原画	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-46	ジャンプリーズ	挿絵・原画	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-47	ジャンプリーズ	挿絵・原画	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-48	ジャンプリーズ	挿絵・原画	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-49	ジャンプリーズ	挿絵・原画	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-50	ジャンプリーズ	挿絵・原画	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-51	ジャンプリーズ	挿絵・原画	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-52	ジャンプリーズ	挿絵・原画	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
4-53	ジャンプリーズ	挿絵・原画	1967	ペン、インク、紙	EGCT	
B-1	「うろんな客」	ニューヨーク、ガーデンシティ：ダブルデイ	1957		I. D. F.	

No.	タイトル	内容・出版社	制作年	材質・技法	所蔵	展示替
B-2	『不幸な子供』	ニューヨーク：イヴァン・オボレンスキー	1961		I. D. F.	
B-3	『恐るべき赤ん坊』	ニューヨーク：ファントッド・プレス	1962		I. D. F.	
B-4	『蟲の神』	ニューヨーク：サイモン&シュスター	1963		I. D. F.	
B-5	『思い出した訪問：人生から取られた物語』	ニューヨーク：サイモン&シュスター	1965		I. D. F.	
B-6	『金箔のコウモリ』	ニューヨーク：サイモン&シュスター	1966		EGH	
B-7	『中国風オベリスク：四つ目のアルファベット』	ニューヨーク：ファントッド・プレス	1970		I. D. F.	
B-8	『失敬な招喚』	ニューヨーク：ファントッド・プレス	1973		I. D. F.	☆
B-9	『蒼い時』	ニューヨーク：ファントッド・プレス	1975		I. D. F.	
B-10	『狂瀾怒濤 あるいはブラックドール騒動』	ニューヨーク：ビューフォート・ブックス	1987		I. D. F.	
B-11	『音叉』	ニューヨーク：ファントッド・プレス	1990		I. D. F.	
B-12	『グリム童話集』 文：ヤコブ・グリム／ 絵：ウォルター・クレイン	ロンドン：マクミラン	1882		I. D. F.	
B-13	『ノンセンス・ブックス』 文・絵：エドワード・リア	ボストン：リトル・ブラウン	1888		I. D. F.	
B-14	『ジャンプリーズ』 文：エドワード・リア／ 絵：エドワード・ゴリー	ニューヨーク：ヤング・スコット	1968		I. D. F.	
B-15	『赤ずきん』 文(訳)：ペアトリス・シェンク・ド・レニエ／ 絵：エドワード・ゴリー	ニューヨーク：アラジン・ブックス	1972		I. D. F.	

第V章 ケープコッドのコミュニティと象

5-1-1	エレファントモス		[1986]	エッチング、紙	EGH	★
5-1-2	エレファントモス		[1986]	エッチング、紙	EGH	★
5-1-3	エレファントモス		[1986]	エッチング、紙	EGH	★
5-1-4	エレファントモス		[1986]	エッチング、紙	EGH	★
5-1-5	エレファントモス		[1986]	エッチング、紙	EGH	
5-1-6	エレファントモス		[1986]	エッチング、紙	EGH	☆
5-1-7	エレファントモス		[1986]	エッチング、紙	EGH	☆
5-1-8	エレファントモス		[1986]	エッチング、紙	EGH	☆
5-1-9	エレファントモス		[1986]	エッチング、紙	EGH	☆
5-2	身繕いされた右向きのゾウ			エッチング、紙	EGH	☆
5-3	深い霧の中、鼻を丸めて右に動くゾウ			エッチング、紙	EGH	☆
5-4	崩れ落ちるゾウ			エッチング、紙	EGH	★
5-5	ゾウと反っくり返る乗り手			エッチング、紙	EGH	★
5-6	鼻が折れた左向きのゾウ			エッチング、紙	EGH	★
5-7	鼻を上に向け3本足で立つゾウ			エッチング、紙	EGH	☆
5-8	座る緑のゾウ			エッチング、紙	EGH	
5-参考	AGU/滝沢工房 ゴリーハウスへの オマージュ	インスタレーション	2023	ラグ：ウール／パベッ ト：木材、布	AGU/滝 沢工房	
B-1	『裏切られた信頼：ドッグイヤー・ライ ド・ポストカードの7つのシリーズ』	マサチューセッツ、オーリアンズ：パ ルナッソス	1990		Gavin Whitelaw	☆

※上映1 エドワード・ゴリーと巡るケープコッドの旅 時間：9分30秒 取材・撮影・編集／Filmed & Edited: Komako Akai Whitelaw
制作：2023年3月

※上映2 GBHテレビ「ミステリー！」シリーズ オープニング・シーン 時間：45秒 放映：2004年

特別展

私たちは何者？ボーダレス・ドールズ

The Infinite World of Japanese Dolls: From Religious Icons to Works of Art

会期＝令和5(2023)年7月1日(土)～8月27日(日)

前期:7月1日(土)～7月30日(日)

後期:8月1日(火)～8月27日(日)

※会期中、一部展示替え

会場＝地下1階主陳列室、2階サロンミュージーゼ、特別陳列室

主催＝渋谷区立松濤美術館

協力＝一般社団法人日本玩具文化財団、横浜人形の家

人形は、体系化することが難しいほどに多様な種類があふれている。そして、日本の人形の歴史を振り返れば、民俗、考古、工芸、彫刻、玩具、現代美術と、実にさまざまなジャンルのボーダーラインを縦横無尽に飛び越えながらあり続けている。分野を問わない、曖昧な存在を武器として生きながらえてきた唯一無二の造形物が人形といえるだろう。

本展は、人形の一括りにはできない複雑な様相を、あえて「芸術」という枠に押し込めず、多様性をもつ人形そのものとして紹介することで、日本の立体造形の根底に脈々と流れてきた精神を問うものであった。何かに縛られることなく軽やかに境界を越えていく日本の人形は、普段、私たちが囚われている「美術」、あるいは「芸術」という概念にさえ揺さぶりをかける。私たちは一体何を「芸術」とし、何を「芸術」ではないとしているのか。それは果たして正しいのか。人形をとおり「芸術」そのものを考える機会となった。

展示は全10章構成とし、平安時代に製作された呪詛人形《人形代》から、現代美術家の村上隆と海洋堂(フィギュアメーカー)の名原型師であるBOMEがタグを組んで制作された《Ko²ちゃん(Project Ko²)》まで、多種多様な91件の人形が勢揃いした。



出品目録

★は京都市指定文化財を指す

No.	指定	作者	作品名	時代	材質・技法	所蔵	展示期間
第1章 それはヒトか、ヒトガタか							
1	★		人形代〔男・女〕〔平安京右京六条三坊六町跡出土〕	平安時代・9世紀	木、墨書	京都市	
2	★		人形代〔平安京右京三条二坊十六町「齋宮」邸跡出土品〕	平安時代・9世紀	木、墨書	京都市	
3			人形代〔平安京右京八条二坊二町出土遺物〕	平安時代・9世紀	木、墨書	京都市考古資料館	
4			人形代〔平安京左京四条一坊出土遺物〕	平安時代・9世紀	木、墨書	京都市考古資料館	
5			伏見城城下町出土遺物	江戸時代18世紀		京都市考古資料館	
			陶人形		陶、釉薬		
			陶人形(犬を抱く人)		陶		
			陶人形(西行法師)		陶、釉薬		
			鳩笛		陶、釉薬		
			火焰太鼓		陶、彩色		
			子椀		陶、釉薬		
		冥銭	金属				
6			オシラサマ	江戸時代	木・布	日本人形博物館	
7			サンスケ	昭和時代・20世紀	木	青森県立郷土館	
8			サンスケ	昭和時代・20世紀	藁	青森県立郷土館	
第2章 社会に組み込まれる人形、社会をつくる人形							
9		三代山川永徳齋	鍾馗	昭和初期頃・20世紀	木・木帛・紙・胡粉・金属 衣裳着人形	吉徳資料室	7/1-7/30
10			太閤秀吉	江戸時代後期・19世紀	木・木帛・紙・胡粉・金属 衣裳着人形	吉徳資料室	8/1-8/27
11			這子	江戸時代	布・綿	さいたま市 岩槻人形博物館	
12			天兒	江戸時代	布・綿	さいたま市 岩槻人形博物館	
13			古式立雛	江戸時代・17～18世紀	紙・彩色	東京国立博物館	7/1-7/30
14			立雛(次郎左衛門頭)	江戸時代・18～19世紀	木、紙、胡粉彩色	東京国立博物館	8/1-8/27
15			寛永雛	江戸時代	木、胡粉、布	さいたま市 岩槻人形博物館	8/1-8/27
16			古式次郎左衛門雛	江戸時代・17～18世紀	木、胡粉、布	東京国立博物館	7/1-7/30
17		末吉石舟	古今雛	文政10(1827)年	木・木帛・紙・胡粉・金属	東京国立博物館	7/1-7/30
18		末吉石舟	三人官女	文政10(1827)年	木・木帛・紙・胡粉・金属	東京国立博物館	8/1-8/27
19			御所人形 太鼓持	江戸時代	木、胡粉	さいたま市 岩槻人形博物館	

No.	指定	作者	作品名	時代	材質・技法	所蔵	展示期間
第3章 「彫刻」の登場、「彫刻家」の誕生							
20		井上清助	世界人類風俗人形	明治43(1910)～ 大正2(1913)年	陶、着彩	東京大学 総合研究博物館	
21		小島与一	三人舞妓	大正13(1924)年	陶、着彩	アトリエー隻眼	
22			奈良人形 葵の上	江戸～明治時代	木、着彩	さいたま市 岩槻人形博物館	
23		森川杜園	能人形 牛若・弁慶	明治時代・19世紀	木、着彩	東京国立博物館	
24		竹内久一	太平楽置物	明治時代・20世紀	木、着彩	東京国立博物館	
25		平櫛田中	気楽坊	昭和42(1967)年	木、着彩	小平市 平櫛田中彫刻美術館	
26		平櫛田中	気楽坊	昭和38(1963)年	木、着彩	小平市 平櫛田中彫刻美術館	
27		青木農美生産組合	木片人形	大正15(1926)年～	木、着彩	上田市立美術館	
28		浅間山農美生産組合	馱馬人形	大正13(1924)年～	木、着彩	上田市立美術館	
29		川路農美生産組合	伊那踊人形	1920～1930年代	木、着彩	上田市立美術館	
30		日本農民美術研究所	木片人形サンプル	制作年不詳	木、着彩	上田市立美術館	
31		吉田白嶺	髭	大正4(1915)年	木、着彩	個人(小杉放庵記念記 念日光美術館 寄託)	7/1- 7/30
32		中村直人	童女立像	昭和2(1927)年	木	個人	8/1- 8/27
第4章 美術作品としての人形—人形芸術運動							
33		平田郷陽	兄と女房	昭和9(1934)年	桐、木彫、着せつけ・ 人形	横浜人形の家	7/1- 7/30
34		平田郷陽	洛北の秋	昭和12(1937)年	桐、木彫、着せつけ・ 人形	国立工芸館	
35		久保佐四郎	朧夜	昭和4(1939)年頃	木、着彩、金箔	さいたま市 岩槻人形博物館	8/1- 8/27
36		久保佐四郎、吉田永光	諸国名玩集	昭和時代初期・ 20世紀	桐塑、紙、胡粉	吉徳資料室	
37		鹿児島寿蔵	紙塑人形 さぬのちがみのお とめ	昭和35(1960)年	紙塑	国立工芸館	
38		鹿児島寿蔵	紙塑人形 黄葉	昭和11(1936)年頃	紙塑	国立工芸館	
39		堀柳女	踏絵	昭和8(1933)年	布ほか	吉徳資料室	
40		堀柳女	御産の折り	昭和16(1941)年	布ほか	大雪美術館	
41		野口光彦	大御代雛	昭和時代初期・ 20世紀	布ほか	さいたま市 岩槻人形博物館	
42		野口光彦	童心戯笛	昭和31(1956)年	木、胡粉	さいたま市 岩槻人形博物館	
第5章 戦争と人形							
43		高浜かの子	騎馬戦	昭和15(1940)年	胡粉、彩色、桐塑	国立工芸館	
44		池田修造	防空演習	昭和15(1940)年頃	木・紙	吉徳資料室	
45			人形・奉公袋	昭和時代・20世紀	布	靖國神社遊就館	
46			人形・御守り	昭和時代・20世紀	布	靖國神社遊就館	
47			陸軍少年将校人形	昭和時代・20世紀	布ほか	個人(杉本博司)	

No.	指定	作者	作品名	時代	材質・技法	所蔵	展示期間
第6章 夢と、憧れと、大人の本気と							
48		竹久夢二	ピエロ	昭和5(1930)～昭和9(1934)年	紙、布、針金、糸	国立工芸館	7/1-7/30
49		竹久夢二	少年	昭和5(1930)～昭和9(1934)年	布、針金、糸	国立工芸館	8/1-8/27
50		岡山さだみ	大江戸	昭和5(1930)年	木・布帛・胡粉 衣裳 着人形	吉徳資料室	
51		川崎ブッペ	女	昭和34(1959)年	木帛	国立工芸館	
52		陽成二	サロメ	昭和3(1928)年	ブロンズ	東京国立近代美術館	
53		河村目呂二(龍興)	春の野	大正6(1917)年頃	素焼き、着彩	河村目呂二 ライブラリィ	7/1-7/30
54		河村目呂二(龍興)	びんぼつ	大正6(1917)年	素焼き、着彩	河村目呂二 ライブラリィ	7/1-7/30
55		河村目呂二(龍興)	姿見	大正7(1918)年	素焼き、着彩	河村目呂二 ライブラリィ	8/1-8/27
56		河村目呂二(龍興)	カメラ	大正10(1921)年	素焼き、着彩	河村目呂二 ライブラリィ	8/1-8/27
57		河村すの子	ジャズ人形シリーズ 長夜	昭和7(1932)年	素焼き、着彩	河村目呂二 ライブラリィ	7/1-7/30
58		河村すの子	変わり雛のうち モガ・ボガ 雛	昭和5(1930)年	素焼き、着彩	河村目呂二 ライブラリィ	8/1-8/27
59		中原淳一	無題	昭和42(1967)年	布ほか	個人	
60-1			初代リカちゃん(2体) 初代ママ リカちゃんハウス 「ドリーム ハウス」 『だっこちゃんマークのファッ ションドール リカちゃん』	昭和42(1967)年	ポリ塩化ビニール、 PVDC、他 ポリ塩化ビニール、 PVDC、他 紙製	一般財団法人 日本玩具文化財団	
60-2			4代目リカちゃん(だいすき リカちゃん) きれいなママ(6代目) やさしいパパ(2代目) ふたごのいもうと にっこりマ キちゃん ふたごのいもうと おちゃめな ミキちゃん かこちゃん(3代目)(みつご のあかちゃん かこちゃん) みくちゃん(3代目)(みつごの あかちゃん みくちゃん) げんくん(3代目)(みつごのあ かちゃん げんくん)	平成27(2015)年- 平成29(2017)年	ポリ塩化ビニール、 PVDC、他	一般財団法人 日本玩具文化財団	
第7章 まるでそこに「いる」人形—生人形							
61			生人形 源平時代侍体坐像(頭 部のみ)	明治時代・20世紀	木彫、桐塑、胡粉彩色、 毛髪、紙張子	東京国立博物館	
62		安本亀八	生人形 束髪立姿明治令嬢体 [頭部のみ]	明治40(1907)年	木彫、桐塑、胡粉彩色、 毛髪、紙張子	東京国立博物館	

No.	指定	作者	作品名	時代	材質・技法	所蔵	展示期間
63		安本亀八	生人形 源平時代大将体立姿 〔頭部のみ〕	明治時代・20世紀	木彫、桐塑、胡粉彩色、 毛髪、紙張子	東京国立博物館	
64		松本喜三郎	素芝鳴尊	明治8(1875)年	木、胡粉、布	桐生市本町四丁目自治 会	7/1- 7/30
65		安本亀八(初代)	松本順人形	明治15(1882)～ 明治16(1883)年	木、着彩	大磯町郷土資料館	8/1- 8/27
66			生人形 鳥帽子・頭	制作年不詳	木・玉眼・毛	日本人形博物館	
67		吉村利三郎	生人形 松江の処刑	昭和6(1931)年頃	木、胡粉、布	三津浜地区まちづくり 協議会	
68		安本亀八(三代)	生人形 徳川時代花見上臈	明治時代・20世紀	木彫、桐塑、胡粉彩色、 毛髪、紙張子	東京国立博物館	
			打掛 白綸子地松竹梅中啓模様	江戸時代・19世紀	綸子(絹)製 刺繍、描 絵、型染		
			間着 紅綸子地唐草立涌牡丹尾 長鳥丸模様	江戸時代・19世紀	綸子(絹)製		
			掛下帯 萌黄綸子地桜檜扇模様	江戸時代・19世紀	綸子(絹)製 刺繍		

第8章 商業×人形×彫刻＝マネキン

69		萩島安二	マネキン	大正14(1925)年	石膏	株式会社 七彩	
70		萩島安二	日本髪	昭和13(1938)年	ブロンズ	株式会社 七彩	
71		萩島安二	波	昭和7(1932)年	アンチモン	株式会社 七彩	
72		萩島安二	マスク(マレーネ・ディー トリッヒ)	昭和13(1938)年	軽合金	東京国立近代美術館	
73		向井良吉	SA-10	昭和27(1952)年	紙、木、胡粉、ラッカー	株式会社 七彩	
74		向井良吉	蟻の城	昭和35(1960)年	アルミニウム	東京国立近代美術館	

第9章 ビュグマリオンの愛と欲望を映し出せ！

75		鶴久暢行(オリエント 工業)	Saint Lumière (セイント・ リュミエール)	令和4(2022)年	シリコン、布ほか	オリエント工業	
76		草野真希子(オリエ ント工業)	麗人形	令和4(2022)年	シリコン、布ほか	オリエント工業	
77		草野真希子(オリエ ント工業)	愛人形	令和5(2023)年	シリコン、布ほか	オリエント工業	
78			有明夫人	昭和58(1983)年	人形:蠟 ムツゴロウ:FRP	妙木コレクション	

第10章 ヒトガタはヒトガタ

79		四谷シモン	ルネ・マグリットの男	昭和45(1970)年	ウレタン樹脂、布	個人(三原宏元)	
80		四谷シモン	未来と過去のイヴ6	昭和48(1973)年	髪、木、ガラス、毛、布	個人(三原宏元)	
81		四谷シモン	解剖学の少年	昭和58(1983)年	紙、木、ガラス、毛、布、 皮	国立工芸館	
82		天野可淡	無題	昭和63(1988)- 昭和64(1989)年頃	石塑粘土、ガラス義眼	国立工芸館	
83		松崎覚	フョードル・ドストエフ スキー	令和4(2022)年	蜜蠟	蠟プロ	
84		工藤千尋	おばといとこたち	制作: 平成17(2005)年 修繕: 平成23(2011)年	布、糸、手芸わた、紙粘 土、化粧品、その他	個人	
85		工藤千尋	約束された子供	平成25(2013)年	ナイロンスッキング、 布、糸、手芸わた、化 粧品、造花、ビーズ、ベ ビーパウダー	個人	

No.	指定	作者	作品名	時代	材質・技法	所蔵	展示期間
86		工藤千尋	快復する私たちの身体	令和2(2020)年	ナイロンストッキング、布、糸、手芸わた、化粧品、ビーズ、ペビーパウダー	個人	
87		BOME	リセットちゃん	平成30(2018)年	レジンキャスト	株式会社海洋堂	
88		BOME	式波・アスカ・ラングレー(テストプラグスーツバージョン)	平成27(2015)年	レジンキャスト	株式会社海洋堂	
89		村上隆	Ko ² ちゃん(Project Ko ²) 1/5原型制作:BOME(海洋堂)	平成9(1997)年	油性塗料、アクリル絵の具、グラスファイバー、鉄	個人	
90		BOME×村上隆	Miss Ko ² 1/5 - TAKASHI MURAKAMI (1996)	平成8(1996)年	レジンキャスト	株式会社海洋堂	
91		BOME×村上隆	Nurse Ko ² 1/5- TAKASHI MURAKAMI (2004)	平成16(2004)年	レジンキャスト	株式会社海洋堂	

特別展

杉本博司 本歌取り 東下り

HIROSHI SUGIMOTO HONKADORI AZUMAKUDARI

会期＝令和5(2023)年9月16日(土)～11月12日(日)

前期：9月16日(土)～10月15日(日) 後期：10月17日(火)～11月12日(日)

※会期中、一部展示替え

会場＝地下1階主陳列室、2階サロン・ミュージーゼ、特別陳列室

主催＝渋谷区立松濤美術館

特別協力＝公益財団法人小田原文化財団

杉本博司(1948～)は、和歌の伝統技法「本歌取り」を日本文化の本質的営みと捉え自身の作品制作に援用し、2022年に姫路市立美術館でこのコンセプトのもとに「本歌取り」展として作品を集結させた。

本歌取りとは、本来、和歌の作成技法のひとつで、有名な古歌(本歌)の一部を意識的に自作に取り入れ、そのうえに新たな時代精神やオリジナリティを加味して歌を作る手法のこと。作者は本歌と向き合い、理解を深めたうえで、本歌取りの決まりごとの中で本歌と比肩する、あるいはそれを超える歌を作ることが求められる。西国の姫路で始まった杉本の本歌取り展は、今回、東国である東京の地で新たな展開を迎えることから、「本歌取り 東下り」と題された。本展を象徴する作品である《富士山図屏風》は、東国への旅中に、旅人が目にする雄大な富士山を描いた葛飾北斎の《富嶽三十六景 凱風快晴》を本歌とした新作で、本展で初公開となった。

またこの他にも、書における臨書を基に、写真暗室内で印画紙の上に現像液又は定着液に浸した筆で書いた《Brush Impression》シリーズなど、本展は新作を中心に構成される一方、中国宋時代の画家である牧谿の水墨画技法を本歌取りとした《カリフォルニア・コンドル》など、これまでの杉本の代表的作品も併せて展示した。さらに、室町時代に制作されたと考えられる《法師物語絵巻》より「死に葉」を狂言「附子」の本歌と捉え、その他の8つの物語と共に一挙公開。現代の作品が古典作品と同調と交錯を繰り返す、写真にとどまらず、書、工芸、建築、芸能をも包み込む杉本の世界とその進化の過程を、新作9件を含む全60件からご覧いただいた。

会期中のイベントとして、杉本の講演会と、杉本の映像作品Noh Climaxの上映会とスペシャルトークを実施。上映会は、杉本、大島輝久(能楽師 シテ方喜多流職分)、足立寛(小田原文化財団)3名に撮影時の話を伺う貴重な機会となった。また関連企画として、《法師物語絵巻》を杉本が独自の解釈により本歌取りした新作狂言『法師物語絵巻 死に葉～「附子」より』『茸』を渋谷区文化総合センター大和田のさくらホールで上演した。(企画・構成：杉本博司、主催：公益財団法人小田原文化財団、共催：渋谷区、後援：公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団、出演：野村万作、野村裕基ほか万作の会)



出品目録

No.	作品名	作家名	制作年	素材／技法	所蔵	表示期間
1	時間の間 ^{はざま}	杉本博司	2023年	ミクストメディア：時計、厨子、鏡、ガラス	作家蔵	通期
2	狩野永徳筆 安土城図屏風 想像屏風風 姫路城図	杉本博司	2022年	ピグメントプリント	作家蔵	前期
3	甘橘山春日社遠望図屏風	杉本博司	2022年	ピグメントプリント	作家蔵	後期
4	富士山図屏風	杉本博司	2023年	ピグメントプリント	作家蔵	通期
5	春日大社藤棚図屏風	杉本博司	2022年	ピグメントプリント	作家蔵	通期
6	歴史の歴史習合図	杉本博司	2008年	ピグメントプリント 杉本表具	作家蔵	通期
7	法師物語絵巻		室町時代(15世紀)	紙本着色	小田原文化財団	通期
8	フォトジェニック・ドローイング001 屋根の輪郭線 レイコック・アビー 1839年11月16日	杉本博司	2009年	調色銀塩写真	ベルナル・ビュフェ 美術館	前期
9	フォトジェニック・ドローイング002 植物標本 1835年頃	杉本博司	2009年	調色銀塩写真	ベルナル・ビュフェ 美術館	後期
10	フォトジェニック・ドローイング003 葉と花の茎 1834-39年頃	杉本博司	2008年	調色銀塩写真	ベルナル・ビュフェ 美術館	前期
11	フォトジェニック・ドローイング005 ルイーザ・ガルウェイとホレーシア・ フィールディング 1842年8月29日	杉本博司	2009年	調色銀塩写真	ベルナル・ビュフェ 美術館	後期
12	フォトジェニック・ドローイング006 チャールズ・ポーターの肖像 1842年4月 7日	杉本博司	2009年	調色銀塩写真	ベルナル・ビュフェ 美術館	後期
13	フォトジェニック・ドローイング008 レース 1839年頃	杉本博司	2009年	調色銀塩写真	ベルナル・ビュフェ 美術館	前期
14	フォトジェニック・ドローイング013 植物標本、おそらくローズマリー 1835年 頃	杉本博司	2009年	調色銀塩写真	ベルナル・ビュフェ 美術館	前期
15	フォトジェニック・ドローイング014 小さい陶器の花瓶 1840年10月19日	杉本博司	2009年	調色銀塩写真	ベルナル・ビュフェ 美術館	後期
16	フォトジェニック・ドローイング015 タルボット家の住み込み家庭教師、アメリ ナ・ペティ女史と考えられる人物 1840- 41年頃	杉本博司	2008年	調色銀塩写真	ベルナル・ビュフェ 美術館	通期
17	Time Exposed: アドリア海、ガルガーノ	杉本博司	1990年-現在	損傷した銀塩写真	作家蔵	通期
18	Time Exposed: 南太平洋、テアライ	杉本博司	1991年-現在	損傷した銀塩写真	作家蔵	通期
19	Time Exposed: 地中海、ラ・シオタ	杉本博司	1989年-現在	損傷した銀塩写真	作家蔵	通期
20	石鏃 ^{せきよく}		縄文時代前期 (9,000-5,000年前)	石器 日本より出土	小田原文化財団	通期
21	石鏃		新石器時代 (9,000-5,000年前)	石器 中央サハラ砂漠より出 土	小田原文化財団	通期
22	搔器 ^{そうき}		後期旧石器時代 (3万-1万5,000年前)	石器	小田原文化財団	通期
23	月桂樹葉形尖頭器		中期旧石器時代 (18万-16万年前)	石器	小田原文化財団	通期
24	尖頭器(握斧) ^{あきふ}		中期旧石器時代 (24万-22万年前)	石器	小田原文化財団	通期
25	Brush Impression いろは歌(四十七文字)	杉本博司	2023年	銀塩写真	作家蔵	前期
26	Brush Impression 愛飢男(四十五文字)	杉本博司	2023年	銀塩写真	作家蔵	後期
27	数理模型025 クエン曲面:負の定曲率曲面	杉本博司	2023年	ステンレス・スチール	作家蔵	通期
28	Brush Impression 0905「月」	杉本博司	2023年	銀塩写真	作家蔵	通期
29	Brush Impression 0906「水」	杉本博司	2023年	銀塩写真	作家蔵	通期
30	Brush Impression 0625「火」	杉本博司	2023年	銀塩写真	作家蔵	通期

No.	作品名	作家名	制作年	素材／技法	所蔵	展示期間
31	Brush Impression 0740「狂」	杉本博司	2023年	銀塩写真	作家蔵	通期
32	相模湾、江之浦	杉本博司	2021年1月1日	ピグメントプリント 杉本表具	作家蔵	通期
33	歪曲的宙感	杉本博司	2010年	ピグメントプリント 杉本表具	作家蔵	通期
34	眼科医の証人01	杉本博司	2014年	ミクストメディア：銀 製検眼鏡一式、銀箔漆 塗り桐箱	作家蔵	通期
35	眼科医の証人02	杉本博司	2014年	ミクストメディア：エ ジプトミイラ棺の眼、 銀製検眼鏡	作家蔵	通期
36	華厳滝図	杉本博司	1977年	リトグラフ 杉本表具	小田原文化財団	通期
37	三鈷剣		鎌倉時代 (13-14世紀)	補作 剣：大野義光、 木製蓮台：瀧本光國 敷板：天平時代 春日 杉古材白土塗(唐招提 寺伝来)	小田原文化財団	通期
38	死者の書 断片		紀元前1400年頃	麻に彩色 杉本表具	小田原文化財団	通期
39	青銅製猫の棺		エジプト第26王朝- 第30王朝 (紀元前664年-紀元 前342年)	青銅、錫、灰	小田原文化財団	通期
40	U2「No Line On The Horizon」 アルバムジャケット表装		2009-23年	印刷物 杉本表具	作家蔵	通期
41	Jikki「いろはうた Transient」		2014年	CDジャケット	杉本博司	通期
42	宙景 001	杉本博司	2023年	ピグメントプリント 杉本表具	作家蔵	通期
43	ギベオン隕石	杉本博司	1838年発見	ナミビア、グレートナ マランド ギベオン 鉄隕石、オクタヘドラ イト鉄、ニッケル 敷板：天平時代(東大寺 伝来)	小田原文化財団	通期
44	カリフォルニア・コンドル	杉本博司	1994年	ピグメントプリント 杉本表具	作家蔵	通期
45	厘細録 ブロークン・ミリメーター	杉本博司	2005年	翡翠(管玉) 古墳時代(3-7世紀)	小田原文化財団	通期
46	瀉嘆	白井晟一	昭和時代 (20世紀後半)	紙本墨書 杉本表具	杉本博司	通期
47	楔形文字		シュメール朝時代 (5,000-4,000年前)	粘土 敷板：根来羅漢盆 徳 治二年銘(1307年)	小田原文化財団	通期
48	『Myologie 完全版』より 頭部	ジャック=フェビ アン・ゴージェ エ・ダゴティ	1745-48年	メゾチント 杉本表具	小田原文化財団	通期
49	『Myologie 完全版』より 顔と首の筋肉	ジャック=フェビ アン・ゴージェ エ・ダゴティ	1745-48年	メゾチント 杉本表具	小田原文化財団	通期
50	『Myologie 完全版』より 右側の顔と首の筋 肉	ジャック=フェビ アン・ゴージェ エ・ダゴティ	1745-48年	メゾチント 杉本表具	小田原文化財団	通期
51	お筆先	出口直	大正4(1915)年	紙本墨書 杉本表具	小田原文化財団	通期
52	桂花の舎 移築案模型	設計：白井晟一 移築案：杉本博 司	2023年		杉本博司	通期
53	古作面 児屋根命		南北朝時代 (1337-92年)	木彫彩色	小田原文化財団	通期
54	In Praise of Shadow 980728	杉本博司	1998年	リトグラフ	HIROMI YOSHII EDITION	通期

No.	作品名	作家名	制作年	素材／技法	所蔵	展示期間
55	叫ぶ女		縄文時代中期 (紀元前3,000 - 紀元 前2,000年)	土偶	小田原文化財団	通期
56	時間の矢	杉本博司	1987年 火炎宝珠形仏舎利残 欠：鎌倉時代(13-14 世紀) 海景：1980年		小田原文化財団	通期
57	十牛図	ジョン・ケージ	1988年	ペーパータオルに水彩 10点組	小田原文化財団	通期
58	十一牛図 円相 素麺のゆでかげん	大田南畝 (蜀山人)	江戸時代後期 (19世紀)	紙本墨書 杉本表具	杉本博司	通期
59	杉本文楽 曾根崎心中 付り観音廻り ヨー ロッパ公演(アルジェンティーナ劇場、ロー マ) 主催：独立行政法人国際交流基金・公益財団 法人小田原文化財団 企画制作：公益財団法人小田原文化財団	杉本博司	2013年	映像：8分14秒	小田原文化財団	通期
60	Noh Climax 翁 神 男 女 狂 鬼 製作・著作：杉本博司・独立行政法人国際交 流基金 制作協力：公益財団法人小田原文化財団・姫 路市立美術館	杉本博司	2022年	映像：5分	小田原文化財団	通期

特別展

「前衛」写真の精神：なんでもないものの変容 瀧口修造・阿部展也・大辻清司・牛腸茂雄

The Spirit of Avant-Garde Photography: Transforming “Nothing Much” TAKIGUCHI Shuzo, ABE Nobuya, OTSUJI Kiyoji, GOCHO Shigeo

会期＝令和5(2023)年12月2日(土)～令和6(2024)年2月4日(日)

前期：2023年12月2日(土)～2024年1月8日(月) 後期：2024年1月10日(水)～2月4日(日)

※会期中、一部展示替え

会場＝地下1階主陳列室、2階サロンミューゼ、特別陳列室

主催＝渋谷区立松濤美術館

特別協力＝武蔵野美術大学 美術館・図書館

企画協力＝株式会社アートインプレッション

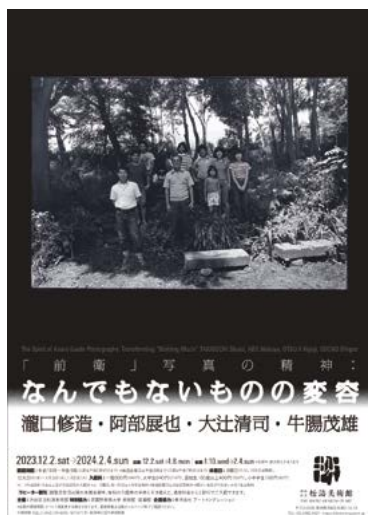
美術評論家の瀧口修造(1903～79)、絵画と写真で活躍した阿部展也(1913～71)、そして写真家である大辻清司(1923～2001)と牛腸茂雄(1946～83)。この4人を軸に、海外のシュルレアリスムや抽象芸術の影響を受けて結成された「前衛写真協会」(瀧口・阿部)から、「なんでもない」日常のスナップ写真(大辻・牛腸)へと至る流れを、全3章でたどった。

1930年代に海外からもたらされたシュルレアリスム写真が、技巧を凝らした新奇的なイメージとして受容されていたことへの不満から、瀧口は写真を「日常現実のふかい襞のかけに潜んでいる美」を見つめるための装置として捉えなおす。しかし太平洋戦争へと向かう時局においてシュルレアリスムを含む前衛芸術が弾圧の対象となっていくなか、この瀧口の発想は十分に成熟することがなかった。

日常を見つめる写真の機能は、戦後、二人の写真家によって再発見されていくことになる。瀧口と阿部に強く影響を受けた大辻、そして「桑沢デザイン研究所」における大辻の教え子だった牛腸の二人である。彼らは復興から経済成長へと揺れ動く社会の中で、「日常現実」を淡々と撮影することを通じて、写真の可能性を開拓した。

本展は、スマートフォンの普及により誰もがスナップ写真を撮るようになっている現代に、美術史的なパースペクティブを与えようとする試みでもあった。言い換えるならば、日本における前衛芸術とストリートスナップを、シュルレアリスム受容を継手として接続する試みであった。一般向けの説明が難解になってしまったことを

反省する一方で、イベントやギャラリートーク後には、スナップという行為、あるいは写真の孕む性質を深く考えようとする、熱心な鑑賞者に出会うことも少なくなかった。



出品目録

・本リストは巡回した作品のうち渋谷区立松濤美術館で展示された作品のみを掲載しています。

第1章 1930-40年代 瀧口修造と阿部展也 前衛写真の台頭と衰退

No.	作家	作品名	制作年	技法	所蔵先	前期	後期
1	撮影:瀧口修造	瀧口たきの写真	1916年頃	技法不詳	個人蔵	●	●
3	ウジェーヌ・アジェ	紳士服店、ゴブラン通り	1925年	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館	●	
4	ウジェーヌ・アジェ	マネキン	1926-27年	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館		●
5	ウジェーヌ・アジェ	肉屋、クリスティース通り	1911年	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館	●	
10	ウジェーヌ・アジェ	労働者の部屋、ロマンヴィル通り	1905年	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館		●
11	ウジェーヌ・アジェ	城壁地区、ポルト・ド・モントルイユ	1912年	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館	●	
13	ウジェーヌ・アジェ	1等の霊柩車	1910年	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館		●
14	ウジェーヌ・アジェ	回転木馬	1923年	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館		●
15	ウジェーヌ・アジェ	日食の間	1912年	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館	●	
17	ウジェーヌ・アジェ	ランプのかさ売り、18区ルピック通り	1899年	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館	●	
18	ウジェーヌ・アジェ	大道芸人	1898年	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館	●	
19	ウジェーヌ・アジェ	娼家、ヴェルサイユ	1921年	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館		●
20	ウジェーヌ・アジェ	舗装工	1899-1900年	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館		●
24	画:阿部芳文(展也) 詩:瀧口修造	『妖精の距離』より 『蝸牛の劇場』	1937年	印刷物	新潟市美術館	●	
25	画:阿部芳文(展也) 詩:瀧口修造	『妖精の距離』より 『レダ』	1937年	印刷物	新潟市美術館		●
26	画:阿部芳文(展也) 詩:瀧口修造	『妖精の距離』より 『魚の欲望』	1937年	印刷物	新潟市美術館	●	
27	画:阿部芳文(展也) 詩:瀧口修造	『妖精の距離』より 『瞬間撮影』	1937年	印刷物	新潟市美術館		●
28	画:阿部芳文(展也) 詩:瀧口修造	『妖精の距離』より 『遮られない休息』	1937年	印刷物	新潟市美術館		●
29	画:阿部芳文(展也) 詩:瀧口修造	『妖精の距離』より 『木魂の薔薇』	1937年	印刷物	新潟市美術館		●
30	画:阿部芳文(展也) 詩:瀧口修造	『妖精の距離』より 『反應』	1937年	印刷物	新潟市美術館	●	
31	画:阿部芳文(展也) 詩:瀧口修造	『妖精の距離』より 『睡魔』	1937年	印刷物	新潟市美術館	●	
32	画:阿部芳文(展也) 詩:瀧口修造	『妖精の距離』より 『影の通路』	1937年	印刷物	新潟市美術館		●
33	画:阿部芳文(展也) 詩:瀧口修造	『妖精の距離』より 『妖精の距離』	1937年	印刷物	新潟市美術館		●
34	画:阿部芳文(展也) 詩:瀧口修造	『妖精の距離』より 『風の受胎』	1937年	印刷物	新潟市美術館	●	
35	画:阿部芳文(展也) 詩:瀧口修造	『妖精の距離』より 『夜曲』	1937年	印刷物	新潟市美術館	●	
38	阿部芳文(展也)	こま	1937-38年頃	鉛筆、紙	新潟市美術館	●	●
39	阿部芳文(展也)	無題	1937年頃	鉛筆、紙	千葉県美術館 (サトウ画廊コレクション)	●	
40	製作:土屋幸夫 撮影:阿部芳文(展也)	夜間作業—オブジェ	1938年	ゼラチン・シルバー・プリント	東京国立近代美術館	●	
41	阿部芳文(展也)	『フォトタイムス』15巻6号表紙掲載写真	1938年	ゼラチン・シルバー・プリント	新潟市美術館	●	●
42	永田一脩	Objet Natural A	1930年代	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館	●	
44	永田一脩	題不詳(風呂の中の二人の男)	1939年頃	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館	●	

No.	作家	作品名	制作年	技法	所蔵先	前期	後期
46	永田一脩	火の山	1939年	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館		●
47	永田一脩	題不詳(石膏像)	1937年頃	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館		●
48	濱谷浩	大型カメラで質感描写の実験	1932年	ゼラチン・シルバー・プリント	濱谷浩写真記念館		●
50	濱谷浩	フォトグラム 自分の横顔	1935年	ゼラチン・シルバー・プリント	濱谷浩写真記念館	●	
52	下郷羊雄 編著	超現実主義写真集『メセム属』	1940年	書籍	名古屋市美術館	●	●
55	坂田稔	球体について	1939年	ゼラチン・シルバー・プリント	個人蔵(名古屋市美術館寄託)	●	
57	坂田稔	題不詳(筍の断面)	制作年不詳	ゼラチン・シルバー・プリント	個人蔵(名古屋市美術館寄託)	●	
58	坂田稔	題不詳(水滴による構成)	1939年頃	ゼラチン・シルバー・プリント	個人蔵(名古屋市美術館寄託)		●
59	坂田稔	竹に取材せる	1939-40年頃	ゼラチン・シルバー・プリント	個人蔵(名古屋市美術館寄託)		●
61	小石清	冬眠	1938年	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館		●
62	小石清	疲労感(泥酔夢)より	1936年	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館	●	
63	小石清	燐素	1938年	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館	●	
64	小石清	叫喚	1938年	ゼラチン・シルバー・プリント	東京都写真美術館		●

資料

M_001	加藤信一	『写真術楷梯』(12版)	1904年	書籍	個人蔵	●	●
M_002		『山繭』2巻7号 復刻版	1926-27年 (1974年復刻)	書籍	個人蔵	●	●
M_003	アンドレ・ブルトン著 瀧口修造訳	『超現実主義と絵画』1930年6月	1930年	書籍	個人蔵	●	●
M_004	瀧口修造・山中散生 編	『海外超現実主義作品集』みづゑ臨時増刊、388号 1937年5月	1937年	雑誌	個人蔵	●	●
M_006		『海外超現実主義作品展』出品目録(複写)	1937年	複写	個人蔵	●	●
M_007		『シュルレアリスム革命』誌 復刻版	1926年 (1975年復刻)	書籍	個人蔵	●	●
M_008		『光畫』第2巻第1号 1933年1月(復刻版)、同刊行会	1933年 (1990年復刻)	雑誌	富山県美術館	●	●
M_009	瀧口修造	『近代芸術』	1938年	書籍	個人蔵	●	●
M_010	アンドレ・ブルトン著	『nadja』復刻版	1928年 (1985年復刻)	書籍	個人蔵	●	●
M_011		『マン・レイ作品集 1920-1934』(第二版)	1934年	書籍	富山県美術館 (東野芳明旧蔵)	●	●
M_017		『フォトタイムス』阿部芳文関連記事	不明	雑誌切り抜き (スクラップ帳貼付)	新潟市美術館	●	●
M_018	阿部芳文	『正吻のバリエーション』『あかね』1号、1940年6月	1940年	雑誌	個人蔵	●	●
M_019	阿部芳文	『大興安嶺の旅より』(書誌詳細不明)		雑誌切り抜き (スクラップ帳貼付)	新潟市美術館	●	●
M_051		『フォトタイムス』1938年3月号	1938年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_052		『フォトタイムス』1938年5月号	1938年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_053		『フォトタイムス』1938年7月号	1938年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_054		『フォトタイムス』1938年8月号	1938年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_055		『フォトタイムス』1938年9月号	1938年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_056		『フォトタイムス』1938年10月号	1938年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_057		『フォトタイムス』1938年11月号	1938年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_058		『フォトタイムス』1939年1月号	1939年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_059		『フォトタイムス』1939年2月号	1939年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_060		『フォトタイムス』1939年3月号	1939年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_061		『フォトタイムス』1939年4月号	1939年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_062		『フォトタイムス』1939年5月号	1939年	雑誌	横浜美術館	●	●

No.	作家	作品名	制作年	技法	所蔵先	前期	後期
M_063		『フォトタイムス』1939年6月号	1939年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_064		『フォトタイムス』1939年7月号	1939年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_065		『フォトタイムス』1939年9月号	1939年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_066		『フォトタイムス』1939年11月号	1939年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_067		『フォトタイムス』1939年12月号	1939年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_068		『フォトタイムス』1940年1月号	1940年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_069		『フォトタイムス』1940年2月号	1940年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_070		『フォトタイムス』1940年3月号	1940年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_071		『フォトタイムス』1940年4月号	1940年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_072		『フォトタイムス』1940年5月号	1940年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_073		『フォトタイムス』1940年6月号	1940年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_074		『フォトタイムス』1940年7月号	1940年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_075		『フォトタイムス』1940年8月号	1940年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_076		『フォトタイムス』1940年9月号	1940年	雑誌	横浜美術館	●	●
M_077		『フォトタイムス』1940年11月号	1940年	雑誌	横浜美術館	●	●
第2章 1950-70年代 大辻清司 前衛写真の復活と転調							
65	演出:阿部展也 撮影:大辻清司	美術家の肖像	1950年	ゼラチン・シルバー・ プリント	千葉市美術館	●	
66	演出:阿部展也 撮影:大辻清司	美術家の肖像、阿部展也のアトリエにて	1950年 (1998年プリント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	東京国立 近代美術館		●
69	演出:阿部展也 撮影:大辻清司	(オブジェ)	1950年	ゼラチン・シルバー・ プリント	千葉市美術館	●	
70	演出:阿部展也 撮影:大辻清司	オブジェ、阿部展也のアトリエにて	1950年	ゼラチン・シルバー・ プリント	東京国立 近代美術館		●
71	演出:阿部展也 撮影:大辻清司	(オブジェ)	1950年	ゼラチン・シルバー・ プリント	千葉市美術館		●
72	演出:阿部展也 撮影:大辻清司	オブジェ、阿部展也のアトリエにて	1950年 (1998年プリント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	東京国立 近代美術館	●	
73	大辻清司	物体A	1949年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
74	大辻清司	物体A	1949年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
76	大辻清司	いたましき物体	1949年 (2007年複写)	ゼラチン・シルバー・ プリント	渋谷区立 松濤美術館	●	●
77	大辻清司	足について	1949年	ゼラチン・シルバー・ プリント	千葉市美術館	●	
78	大辻清司	新宿・夜	1952年 (1980年代プリント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	渋谷区立 松濤美術館		●
80	大辻清司	新宿・夜	1952年 (1980年代プリント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	渋谷区立 松濤美術館	●	
81	大辻清司	開けるな!	1953年 (1980年代プリント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	渋谷区立 松濤美術館	●	
82	大辻清司	開けるな!	1953年 (1980年代プリント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	渋谷区立 松濤美術館		●
83	大辻清司	陳列窓	1956年 (1980年代プリント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	渋谷区立 松濤美術館	●	
85	大辻清司	陳列窓	1956年 (1980年代プリント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	渋谷区立 松濤美術館		●
88	大辻清司	陳列窓	1956年 (1980年代プリント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	渋谷区立 松濤美術館	●	●
89	大辻清司	氷紋	1956年 (1980年代プリント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	渋谷区立 松濤美術館	●	

No.	作家	作品名	制作年	技法	所蔵先	前期	後期
90	大辻清司	氷紋	1956年 (1980年代プリント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	渋谷区立 松濤美術館		●
91	大辻清司	氷紋	1956年 (1980年代プリント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	渋谷区立 松濤美術館	●	
92	大辻清司	氷紋	1956年 (1980年代プリント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	渋谷区立 松濤美術館		●
96	大辻清司	無言歌	1956年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
100	大辻清司	無言歌	1956年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
101	大辻清司	無言歌	1956年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
102	大辻清司	航空機	1957年 (1980年代プリント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	渋谷区立 松濤美術館	●	
103	大辻清司	航空機	1957年 (1980年代プリント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	渋谷区立 松濤美術館		●
104	大辻清司	航空機	1957年 (1980年代プリント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	渋谷区立 松濤美術館	●	●
105	製作:山口勝弘 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年1月21日号 「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年	ゼラチン・シルバー・ プリント	千葉市美術館	●	
106	製作:北代省三 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年2月4日号 「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年	ゼラチン・シルバー・ プリント	千葉市美術館	●	
107	製作:北代省三 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年3月4日号 「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年	ゼラチン・シルバー・ プリント	千葉市美術館		●
108	製作:斎藤義重 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年4月15日号 「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年	ゼラチン・シルバー・ プリント	千葉市美術館		●
109	製作:山口勝弘 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年7月22日号 「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年	ゼラチン・シルバー・ プリント	千葉市美術館		●
110	製作:勅使河原蒼風 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年9月16日号 「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年	ゼラチン・シルバー・ プリント	千葉市美術館		●
111	製作:勅使河原蒼風 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年10月21日号 「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年	ゼラチン・シルバー・ プリント	千葉市美術館	●	
112	製作:長谷川三郎 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年10月28日号 「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年	ゼラチン・シルバー・ プリント	千葉市美術館	●	
113	製作:勅使河原蒼風 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年11月25日号 「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年	ゼラチン・シルバー・ プリント	千葉市美術館		●
114	製作:長谷川三郎 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年12月2日号 「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年	ゼラチン・シルバー・ プリント	千葉市美術館		●
115	製作:長谷川三郎 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年1月14日号 「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年頃	ゼラチン・シルバー・ プリント	千葉市美術館		●
116	製作:斎藤義重 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年1月14日号 「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年	ゼラチン・シルバー・ プリント	富山県美術館	●	
117	製作:斎藤義重 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年1月14日号 「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年	ゼラチン・シルバー・ プリント	富山県美術館	●	
119	製作:斎藤義重 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年1月14日号 「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年	ゼラチン・シルバー・ プリント	富山県美術館		●
120	製作:斎藤義重 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年2月18日号 「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年	ゼラチン・シルバー・ プリント	富山県美術館	●	

No.	作家	作品名	制作年	技法	所蔵先	前期	後期
121	製作:斎藤義重 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年3月11日号「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年	ゼラチン・シルバー・プリント	富山県美術館	●	
122	製作:斎藤義重 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年3月11日号「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年	ゼラチン・シルバー・プリント	富山県美術館		●
123	製作:斎藤義重 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年4月15日号「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年	ゼラチン・シルバー・プリント	富山県美術館	●	
124	製作:斎藤義重 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年5月6日号「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年	ゼラチン・シルバー・プリント	富山県美術館	●	
125	製作:斎藤義重 撮影:大辻清司	『アサヒグラフ』1953年6月3日号「APN」のためのカット(別バージョン)	1953年	ゼラチン・シルバー・プリント	富山県美術館		●
126	撮影:瀧口修造	イタリア紀行	1958年	ゼラチン・シルバー・プリント	渋谷区立松濤美術館	●	●
127	撮影者不詳	欧州にて	制作年不詳	技法不詳	個人蔵	●	●
128	撮影:瀧口修造	瀧口綾子夫人	1972年	技法不詳	個人蔵	●	●
133	大辻清司 プリント: 鈴木秀ヲ	書斎のオブジェ	2003年 (1980年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント	富山県美術館	●	●
134	大辻清司 プリント:鈴木秀ヲ	書斎のオブジェ	2003年 (1980年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント	富山県美術館	●	●
135	大辻清司 プリント:鈴木秀ヲ	書斎のオブジェ	2003年 (1980年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント	富山県美術館	●	●
136	増田正	「阿部展也写真展 5つの街と人」ポスター	1959年	シルクスクリーン	新潟市美術館	●	●
137	大辻清司	大辻清司実験室①〈たんなるモノ〉 いつも二つ、机の上にある鉾石標本	1974年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	
138	大辻清司	大辻清司実験室①〈たんなるモノ〉 灰皿になっているロールフィルム現像皿	1974年 (2001年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館		●
139	大辻清司	大辻清司実験室①〈たんなるモノ〉 ちり紙に包んであったウイロウの端	1974年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	
140	大辻清司	大辻清司実験室①〈たんなるモノ〉 海水浴場で拾った大粒の砂、または小粒の砂利	1974年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館		●
141	大辻清司	大辻清司実験室①〈たんなるモノ〉 破りすてたあとで拾った大事なデータのある封筒	1974年 (2001年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	
142	大辻清司	大辻清司実験室②いとし〈モノ〉 たち ここにこんなものがあったのかと、いろいろ発見した写真。	1974年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館		●
143	大辻清司	大辻清司実験室②いとし〈モノ〉 たち 無造作にピン止めて置いていただけなのに、写真で区切ると意外にいい効果になっている写真。	1974年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	
144	大辻清司	大辻清司実験室②いとし〈モノ〉 たち うまく作ってやろうと思うので、八年たっても手をつけられないプラモデルの写真。	1974年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館		●
145	大辻清司	大辻清司実験室②いとし〈モノ〉 たち 友人からもらったメキシコとイタリアの土産、なぜか捨てられない時計の内臓、昨年秋に抜けてしまった私の白歯、その他のセット	1974年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	
146	大辻清司	大辻清司実験室②いとし〈モノ〉 たち ジャンク箱の一つで、四十年眠ったままのスイッチが二つ入っている。	1974年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館		●

No.	作家	作品名	制作年	技法	所蔵先	前期	後期
147	大辻清司	大辻清司実験室③〈ソレがソコにある〉 戸口には入らなかった黒々とした足跡	1971年 (2001年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
148	大辻清司	大辻清司実験室③〈ソレがソコにある〉 熱気球がうまく昇らなくて、朝早くからがんばっているひと	1971年 (2001年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
149	大辻清司	大辻清司実験室③〈ソレがソコにある〉 石炭を積み終えた人	1970年 (2002年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
150	大辻清司	大辻清司実験室③〈ソレがソコにある〉 その上にも芝が植えてある、公園にあった木箱	1968年 (1975年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
151	大辻清司	大辻清司実験室④〈ソレとソレの間〉 ソレとソレの間	1975年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
152	大辻清司	大辻清司実験室④〈ソレとソレの間〉 ソレとソレの間	1975年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
153	大辻清司	大辻清司実験室④〈ソレとソレの間〉 ソレとソレの間	1975年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
154	大辻清司	大辻清司実験室④〈ソレとソレの間〉 ソレとソレの間	1975年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
155	大辻清司	大辻清司実験室④〈ソレとソレの間〉 ソレとソレの間	1975年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
156	大辻清司	大辻清司実験室④〈ソレとソレの間〉 ソレとソレの間	1975年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
157	大辻清司	大辻清司実験室⑤〈なんでもない写真〉 なんでもない写真	1975年 (1980年代プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
158	大辻清司	大辻清司実験室⑤〈なんでもない写真〉 なんでもない写真	1975年 (1980年代プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
159	大辻清司	大辻清司実験室⑤〈なんでもない写真〉 なんでもない写真	1975年 (2001年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
160	大辻清司	大辻清司実験室⑤〈なんでもない写真〉 なんでもない写真	1975年 (2001年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
161	大辻清司	大辻清司実験室⑤〈なんでもない写真〉 なんでもない写真	1975年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
162	大辻清司	大辻清司実験室⑤〈なんでもない写真〉 なんでもない写真	1975年 (2001年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
163	大辻清司	大辻清司実験室⑥〈写真の見せ方〉 写真の見せ方	1975年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
164	大辻清司	大辻清司実験室⑥〈写真の見せ方〉 写真の見せ方	1975年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
165	大辻清司	大辻清司実験室⑥〈写真の見せ方〉 写真の見せ方	1975年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
166	大辻清司	大辻清司実験室⑥〈写真の見せ方〉 写真の見せ方	1975年 (1998年プリント)	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
167	大辻清司	大辻清司実験室⑥〈写真の見せ方〉 写真の見せ方	1975年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
168	大辻清司	大辻清司実験室⑦〈思わぬ出来事〉 思わぬ出来事	1975年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
169	大辻清司	大辻清司実験室⑦〈思わぬ出来事〉 思わぬ出来事	1975年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
170	大辻清司	大辻清司実験室⑦〈思わぬ出来事〉 思わぬ出来事	1975年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
171	大辻清司	大辻清司実験室⑦〈思わぬ出来事〉 思わぬ出来事	1975年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	

No.	作家	作品名	制作年	技法	所蔵先	前期	後期
172	大辻清司	大辻清司実験室⑦〈思わぬ出来事〉 思わぬ出来事	1975年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
173	大辻清司	大辻清司実験室⑦〈思わぬ出来事〉 思わぬ出来事	1975年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
174	大辻清司	大辻清司実験室⑧〈小名木川界限〉 小名木川界限	1975年 (1980年代プ リント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
175	大辻清司	大辻清司実験室⑧〈小名木川界限〉 小名木川界限	1975年 (1998年プ リント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
176	大辻清司	大辻清司実験室⑧〈小名木川界限〉 小名木川界限	1975年 (2001年プ リント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
177	大辻清司	大辻清司実験室⑨〈なりゆき構図〉 なりゆき構図	1975年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
178	大辻清司	大辻清司実験室⑨〈なりゆき構図〉 なりゆき構図	1975年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
179	大辻清司	大辻清司実験室⑨〈なりゆき構図〉 なりゆき構図	1975年 (1998年プ リント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
180	大辻清司	大辻清司実験室⑨〈なりゆき構図〉 なりゆき構図	1975年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
181	大辻清司	大辻清司実験室⑨〈なりゆき構図〉 なりゆき構図	1975年 (2001年プ リント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
182	大辻清司	大辻清司実験室⑩〈この部屋の中で〉 浜田浜雄氏	1975年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
183	大辻清司	大辻清司実験室⑩〈この部屋の中で〉 石元泰博氏夫妻	1975年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
184	大辻清司	大辻清司実験室⑩〈この部屋の中で〉 石元泰博氏夫妻	1975年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
185	大辻清司	大辻清司実験室⑩〈この部屋の中で〉 戸村浩氏夫妻とお子たち	1975年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
186	大辻清司	大辻清司実験室⑩〈この部屋の中で〉 瀧口修造氏夫妻	1975年 (1998年プ リント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
187	大辻清司	大辻清司実験室⑪〈間もなく壊さ れる家〉 雨が浸ると、水浸しになり戸も開 かなくなる玄関	1975年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
188	大辻清司	大辻清司実験室⑪〈間もなく壊さ れる家〉 夜昼雨戸を締め切ったままの仕事 場にあがる階段	1975年 (2001年プ リント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
189	大辻清司	大辻清司実験室⑪〈間もなく壊さ れる家〉 先住者が焼け焦した跡が丸い穴に なって残っている廊下	1975年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
190	大辻清司	大辻清司実験室⑪〈間もなく壊さ れる家〉 一日に数回訪れる小部屋にある薄 緑色をした典雅な形の磁器	1975年 (2001年プ リント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
191	大辻清司	大辻清司実験室⑪〈間もなく壊さ れる家〉 鉄格子のはまった天窓のある台所 のすすけた天井	1975年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
192	大辻清司	大辻清司実験室⑪〈間もなく壊さ れる家〉 なんとなく庭先にまとめてある鉢 など	1975年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
193	大辻清司	大辻清司実験室⑪〈間もなく壊さ れる家〉 なんとなく庭先にまとめてある鉢 など	1975年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	
	大辻清司	大辻清司実験室⑫ そして家がなくなった	1975年	スライドショー	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	●
194	大辻清司	住まいができたら	1976年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館		●
195	大辻清司	住まいができたら	1976年	ゼラチン・シルバー・ プリント	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	

No.	作家	作品名	制作年	技法	所蔵先	前期	後期
196	大辻清司	住まいができたら	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館		●
197	大辻清司	住まいができたら	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	
198	大辻清司	住まいができたら	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館		●
199	大辻清司	住まいができたら	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	
200	大辻清司	住まいができたら	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館		●
201	大辻清司	住まいができたら	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	
202	大辻清司	住まいができたら	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館		●
203	大辻清司	住まいができたら	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	
204	大辻清司	住まいができたら	1976年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館		●
205	大辻清司	文房四宝:筆	1972年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	
206	大辻清司	文房四宝:筆	1972年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館		●
207	大辻清司	文房四宝:筆の町を訪ねて	1972年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	
208	大辻清司	文房四宝:筆の町を訪ねて	1972年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館		●
209	大辻清司	文房四宝:墨	1972年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	
210	大辻清司	文房四宝:墨	1972年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館		●
211	大辻清司	文房四宝:墨の工房を訪ねて	1972年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	
212	大辻清司	文房四宝:墨の工房を訪ねて	1972年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館		●
213	大辻清司	文房四宝:硯	1972年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	
214	大辻清司	文房四宝:硯	1972年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館		●
215	大辻清司	文房四宝:硯石の山と工房を訪ねて	1972年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	
216	大辻清司	文房四宝:硯石の山と工房を訪ねて	1972年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館		●
217	大辻清司	文房四宝:紙漉きの里を訪ねて	1972年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	
218	大辻清司	文房四宝:紙漉きの里を訪ねて	1972年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館		●
219	大辻清司	文房四宝:紙漉きの里を訪ねて	1972年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	
220	大辻清司	文房四宝:紙漉きの里を訪ねて	1972年	ゼラチン・シルバー・プリント	武蔵野美術大学美術館・図書館		●
特別出品	大辻清司	界限	1974年	ピグメント・プリント(120mmリバーサルフィルムから出力)	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	●
特別出品	大辻清司	上原2丁目	1973年	映画(カラー、サウンド、13分47秒、16mm 動画フィルムから出力)	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	●
資料							
M_078～086		大辻清司旧蔵『フォトタイムス』1938年1月号～12月号	1938年	雑誌	武蔵野美術大学美術館・図書館	●	
M_087～095		大辻清司旧蔵『フォトタイムス』1939年1月号～10月号	1939年	雑誌	武蔵野美術大学美術館・図書館		●
M_107	阿部展也	「フォト・ニュールック 前衛写真家作品集」 『週刊朝日』1949年秋季増刊号	1949年	雑誌	個人蔵	●	●

No.	作家	作品名	制作年	技法	所蔵先	前期	後期
M_108		「モダン・アーティストによる新しい演出写真」 『Camera』1950年10月号	1950年	雑誌	個人蔵	●	●
M_109		「ヌード撮影会—不思議な—」 『フォトアート 臨時増刊 裸婦』 1951年12月	1951年	雑誌	個人蔵	●	●
M_110		『写真サロン』1955年1月号	1955年	雑誌	個人蔵	●	
M_111		『写真サロン』1955年4月号	1955年	雑誌	個人蔵		●
M_112		『写真サロン』1955年7月号	1955年	雑誌	個人蔵	●	
M_113		『写真サロン』1955年8月号	1955年	雑誌	個人蔵		●
M_115		『アサヒグラフ』1953年4月15日号	1953年	雑誌	個人蔵	●	●
M_116		『アサヒグラフ』1953年4月22日号	1953年	雑誌	個人蔵	●	●
M_117		『アサヒグラフ』1953年11月11日号	1953年	雑誌	個人蔵	●	●
M_121		『アサヒカメラ』1975年1月号	1975年	雑誌	個人蔵	●	
M_122		『アサヒカメラ』1975年2月号	1975年	雑誌	個人蔵	●	
M_123		『アサヒカメラ』1975年3月号	1975年	雑誌	個人蔵	●	
M_124		『アサヒカメラ』1975年4月号	1975年	雑誌	個人蔵	●	
M_125		『アサヒカメラ』1975年5月号	1975年	雑誌	個人蔵	●	
M_126		『アサヒカメラ』1975年6月号	1975年	雑誌	個人蔵	●	
M_127		『アサヒカメラ』1975年7月号	1975年	雑誌	個人蔵		●
M_128		『アサヒカメラ』1975年8月号	1975年	雑誌	個人蔵		●
M_129		『アサヒカメラ』1975年9月号	1975年	雑誌	個人蔵		●
M_130		『アサヒカメラ』1975年10月号	1975年	雑誌	個人蔵		●
M_131		『アサヒカメラ』1975年11月号	1975年	雑誌	個人蔵		●
M_132		『アサヒカメラ』1975年12月号	1975年	雑誌	個人蔵		●
M_133		『アサヒカメラ』1978年4月号	1978年	雑誌	個人蔵	●	●
M_134		『アサヒカメラ』1969年4月増大号	1968年	雑誌	個人蔵	●	●
M_135		『アサヒカメラ』1979年7月号増刊	1979年	雑誌	個人蔵	●	●
M_136	阿部展也	「私の写真」『芸術新潮』 3巻7号 1952年7月	1952年	雑誌	個人蔵	●	●
M_137	阿部展也	「新世界風物誌 インド 古くて新しいもの」 「町角にみる インドの職業」 『中学生の友 2年』 1巻1号、1957年4月	1957年	雑誌	個人蔵	●	●
M_138		「新しい写真」『別冊アトリエ』34号、1957年5月	1957年	雑誌切り抜き	新潟市美術館	●	●
M_139	阿部展也	『インドの一断面』 岩波写真文庫284	1958年	書籍	個人蔵	●	●
M_143		「阿部展也写真展 5つの街と人」 関連コンタクトシート	1950年代	コンタクトシート (スクラップ帳貼付)	新潟市美術館	●	●
M_145		「5つの街と人」展 パンフレットと広告	1960年	印刷物 (スクラップ帳貼付)	新潟市美術館	●	●
M_149		『藝術新潮』1958年8月号	1958年	雑誌	富山県美術館	●	●
M_150		『藝術新潮』1958年12月号	1958年	雑誌	富山県美術館	●	●
M_156	スタジオ50 (編)	『モダンアート・ニュース』	1950年	雑誌	武蔵野美術大学 美術館・図書館	●	●
補足資料1		『SD』1969年5月号	1969年	雑誌	個人蔵	●	●
補足資料2		『現代詩手帖』1974年10月号	1974年	雑誌	個人蔵	●	●
補足資料3		『アサヒカメラ教室 第3巻 スナップ写真』1970年	1970年	雑誌	個人蔵	●	●
補足資料4	杉村勇造、永井敏男 (著)、大辻清司(写真)	『文房四宝』	1972年	書籍	個人蔵	●	●
第3章 1960—80年代 牛腸茂雄 前衛写真のゆくえ							
221	牛腸茂雄	代々木上原の大辻宅	制作年不詳	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館	●	
222	牛腸茂雄	桑沢デザイン研究所課題 「空」	1966-67年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館	●	
223	牛腸茂雄	桑沢デザイン研究所課題 「空」	制作年不詳	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館		●

No.	作家	作品名	制作年	技法	所蔵先	前期	後期
224	牛腸茂雄	桑沢デザイン研究所課題 「空」	1966-67年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館	●	
225	牛腸茂雄	桑沢デザイン研究所課題 「空」	1966-67年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館		●
226	牛腸茂雄	桑沢デザイン研究所課題 「空」	1966年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館	●	
229	牛腸茂雄	桑沢デザイン研究所課題 「空」	1966年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館		●
231	牛腸茂雄	桑沢デザイン研究所課題 「空」	1966-67年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館	●	
232	牛腸茂雄	桑沢デザイン研究所課題 「空」	1966-67年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館		●
235	牛腸茂雄	桑沢デザイン研究所課題 「テクスチュア」	1966年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館		●
239	牛腸茂雄	桑沢デザイン研究所課題 「テクスチュア」	制作年不詳	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館		●
240	牛腸茂雄	桑沢デザイン研究所課題 「多重露光」	1966-67年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館	●	
244	牛腸茂雄	桑沢デザイン研究所課題 「テクスチュア」	1966年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館	●	
245	牛腸茂雄	桑沢デザイン研究所課題 「テクスチュア」	制作年不詳	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館	●	
248	牛腸茂雄	桑沢デザイン研究所課題 「アウトフォーカス」	1966-67年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館		●
250	牛腸茂雄	桑沢デザイン研究所課題 「ポートレート」	1967年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館	●	
252	牛腸茂雄	桑沢デザイン研究所課題 「ポートレート」	1967年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館		●
254	高梨豊	豊島区西武デパート 4月25日〈東京人〉より	1965年	ゼラチン・シルバー・ プリント	東京都 写真美術館	●	
255	高梨豊	新宿区新宿駅西口広場 3月31日〈東京人〉より	1965年	ゼラチン・シルバー・ プリント	東京都 写真美術館	●	
256	高梨豊	船橋市ヘルスセンター 6月17日〈東京人〉より	1965年	ゼラチン・シルバー・ プリント	東京都 写真美術館	●	
257	高梨豊	新宿区角筈-1 ビュフェととや〈東京人〉より	1965年	ゼラチン・シルバー・ プリント	東京都 写真美術館		●
258	高梨豊	新宿区伊勢丹 10月23日〈東京人〉より	1965年	ゼラチン・シルバー・ プリント	東京都 写真美術館		●
259	高梨豊	新宿区新宿駅西口広場 3月28日〈東京人〉より	1965年	ゼラチン・シルバー・ プリント	東京都 写真美術館		●
260	高梨豊	新宿区南元町 4月4日〈東京人〉より	1965年	ゼラチン・シルバー・ プリント	東京都 写真美術館		●
261	牛腸茂雄	無題	1966-70年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館	●	
262	牛腸茂雄	こども 2 明治神宮	1967年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館		●
263	牛腸茂雄	こども 3 東陽公園	1967-68年 (2004年プリ ント)	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館	●	
264	牛腸茂雄	無題	1966-70年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館		●
265	牛腸茂雄	無題	1966-70年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館	●	
266	牛腸茂雄	who's who 5	1967-69年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館		●
267	牛腸茂雄	無題	1967-68年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館	●	
268	牛腸茂雄	who's who 4	1967-69年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館		●
269~292	牛腸茂雄	日々 1~24	1967-69年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館	1.3,5,7,9, 11,13,15,17, 19,21,23	2,4,6,8,10, 12,14,16, 18,20,22
293~298	牛腸茂雄	幼年の「時間」1~6	1980年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟市美術館	1,3,5	2,4,6
299~309	牛腸茂雄	扉をあけると 1~12	1972-77年	インク、紙	新潟市美術館	1,3,7,12	2,4,8,10
310	瀧口修造	「私の心臓は時を刻む」 No. 0 詩人の肖像	1962年	透明水彩絵の具、イン ク、紙	富山県美術館	●	

No.	作家	作品名	制作年	技法	所蔵先	前期	後期
391~410	瀧口修造	デカルコマニー 「私の心臓は時を刻む」V 巣立つスフィンクス	1962年	透明水彩絵の具、紙	富山県美術館	うち2点	うち3点
471~530	牛腸茂雄	SELF AND OTHERS 1~60	1977年	ゼラチン・シルバー・ プリント	新潟県立 近代美術館	1,3,4,6,8, 13,15,18, 28,30	31,34,35,40, 41,46,50,58, 59,60
531~577	牛腸茂雄	見慣れた街の中で	1978-80年 (2004年プリ ント)	ラムダ・プリント	新潟市美術館	1-24	25-47
	撮影:牛腸茂雄、寺本 宗男、三浦和人	映画「まち」	1970年	16mm B/W(5分)	新潟市美術館	●	●
	撮影:牛腸茂雄、田中 耕一、佐治嘉隆 プロデューズ:アトリ エ・ブロック	映画「GAME OVER」	1975年	16mm color(7分)	新潟市美術館	●	●
	撮影:牛腸茂雄、田中 耕一、佐治嘉隆 キャスト:鈴木慶子、 後上みさ緒 プロデューズ:アトリ エ・ブロック	映画「The Grass Visitor」	1975年	16mm color(7分)	新潟市美術館	●	●
資料							
M_152	牛腸茂雄	写真集「日々」	1971年	書籍	新潟市美術館	●	●
補足資料5		『SD』1971年6月号	1971年	雑誌	個人蔵	●	●
特別出品	牛腸茂雄	自筆ノート	1960年代末 -70年代初	インク、紙	個人蔵	●	●

2024 松濤美術館公募展

2024 Shoto Museum of Art Exhibition of Works by the General Public

会期＝令和6(2024)年2月27日(火)～2024年3月16日(土)

会場＝地下1階主陳列室

主催＝渋谷区立松濤美術館

松濤美術館公募展は、今回で41回目となった。本展は、渋谷区に在住、在勤および在学の方々の創作活動の活性化を目的として、1981年の美術館開館の翌年から始められた。これまで、平面作品を募集の対象とし、油彩や水彩、日本画や版画等、様々な素材・技法による作品の応募を受け付けてきた。

しかし、昨今の表現方法のいっそうの多様化を受け、今回より写真やデジタルアート(ただし電源を使用せずプリントアウト済みのもの)での作品も対象に加え、応募要項にも明記した。これが功を奏してか、コロナ禍下で減少が続いていた応募者数はやや回復の傾向が見られた。15歳から86歳までの幅広い年齢層から、127点の力作が応募され、厳正な審査の結果、98点が入選し、さらにその中から13点の受賞作品を決定した。受賞者も10代から80代まで各年代にわたった。なお、例年優秀賞は2名選出されるが、今回は1名のみ選出とし他は該当者なしとなった。

また、これまで表彰式への出席や公募展の図録の執筆は審査委員長のみに依頼してきたが、今回は審査委員3名に専門分野に沿って表彰式で講評をいただいたほか、図録へも全員に寄稿をいただくなどの新たな試みも行った。

審査状況

応募作品総数 127点

入選作品総数 98点

審査委員

岡部 友子氏(審査委員長・美術史家)

鈴木 のぞみ氏(美術家)

村岡 貴美男氏(日本画家)

【松濤美術館賞】

宮原 ナノ 《出発》

【優秀賞】

成清 一生 《記憶の中へ》

【学生優秀賞】

殿岡 祐天 《清き街》

【奨励賞】

前田 由美 《花と楽器》

西村 祐馬 《Touched (Skin)》

田川 朱梨 《貴婦猫たちのランチ》

田中 章夫 《Things VIII》

福里 弘之 《オムニバス》

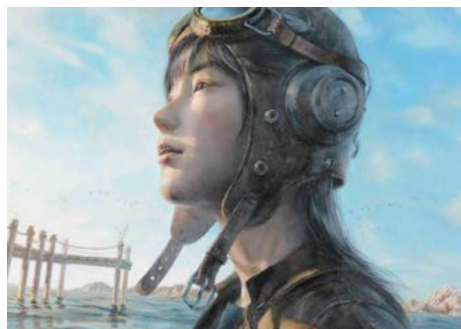
今井 政男 《虹のかけら》

畠山 美帆 《恍惚》

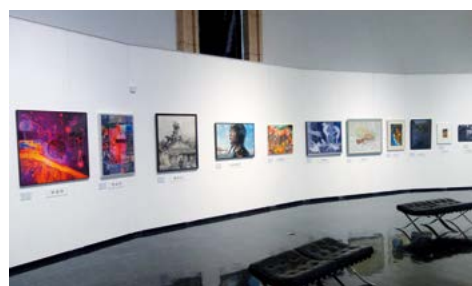
井本 千樹 《人間交差点》

宮倉 澄子 《ねこにきゅうり》

Lin Xi 《深淵》



松濤美術館賞 宮原ナノ 《出発》



サロン展

渋谷区立松濤美術館所蔵

土地の記憶と記録 風景を巡る旅

Salon Exhibition “The Shoto Museum of Art Collection, Memories and Records of Places: The Journey through the Scene”

令和6(2024)年2月27日(火)～3月16日(土)

会場＝2階サロンミュージゼ、特別陳列室

主催＝渋谷区立松濤美術館

「風景」とは、ひとことに言っても、自然風景、都市風景、日常の風景などさまざまである。旅先の土地、散策の中で入った路地、日々生活する部屋、心の中の心象風景、理想の地——初めて見る風景かもしれないし、どこか見覚えのある場所だったり、よく知っている有名スポットかもしれない。フレームの中に切り取られた風景は、鑑賞者である私たちを、時と空間を超えてその時その場所に誘うのである。本展では、当館が所蔵する風景にまつわる油彩画や水彩画、日本画、版画、そして写真作品の中から、77件を選び紹介した。

展覧会中はギャラリートークを2回開催し、出品作品だけでなく、当館の所蔵作品について知っていただく良い機会にもなった。

無料配布用印刷物として、出品作品である南薫造《イングランド》と石田喜一郎《清掃》のポストカードを作成した。サロンミュージゼのテーブル上に置き、自由にお持ち帰りいただけるようにした。

サロンの風景

渋谷区立松濤美術館所蔵

土地の記憶と記録 風景を巡る旅

「風景」とは、ひとことに言っても、自然風景、都市風景、日常の風景などさまざまである。旅先の土地、散策の中で入った路地、日々生活する部屋、心の中の心象風景、理想の地——初めて見る風景かもしれないし、どこか見覚えのある場所だったり、よく知っている有名スポットかもしれない。フレームの中に切り取られた風景は、鑑賞者である私たちを、時と空間を超えてその時その場所に誘うのである。本展では、当館が所蔵する風景にまつわる油彩画や水彩画、日本画、版画、そして写真作品の中から、77件を選び紹介した。

本展では、当館が所蔵する風景にまつわる油彩画や水彩画、日本画、版画、そして写真作品の中から、77件を選び紹介した。

2024年 2月27日(火)～3月16日(土)

3月10日(日) 10時～18時

渋谷区立松濤美術館

THE SHOTO MUSEUM OF ART

〒151-8541 東京都渋谷区松濤2-1-1

Tel. 03-3488-5452

http://shoto-museum.jp

2024年2月27日(火)～3月16日(土)

観覧料：午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
※要予約(1日最大観覧人数は100名)

休 日：月曜日

企 業：渋谷区立松濤美術館 2階サロンミュージゼ-特別陳列室

主 催：渋谷区立松濤美術館

同時開催：2024年歳末美術展

こちらに入館料無料



出品目録

No.	作者	作品名	制作年	サイズ	材質・技法
第1章 自然の風景					
1	石井柏亭	木曾川風景(鷓沼)	1929(昭和4)年	37.0×51.5	水彩・紙
2	森芳雄	冬の松	1959(昭和34)年	50.0×60.5	油彩・カンヴァス
3	南薫造	イングランド	1908(明治41)年	34.0×55.0	水彩・紙
4	南薫造	INDIA	1916(大正5)年	17.7×25.2	水彩・紙
5	南薫造	海景	1946(昭和21)年	25.2×19.4	水彩・紙
6	石田喜一郎	風景ーペンリス (原題:Landscape-Penrith)	1920年代	25.7×33.6	プロムオイルプリント
7	石田喜一郎	ファンタジー (原題:Fantasy)	1922(大正11)年	33.4×25.8	プロムオイルプリント
8	掛札功	作品名不詳	1925(大正14)年	15.5×28.5	ゼラチンシルバープリント
9	安井仲治	麦畑と富士	1936~37 (昭和11~12)年 (2004年制作のモダン プリント)	21.5×31.2	ゼラチンシルバープリント
10	福原信三	樺のトンネル	1930年代	29.7×23.7	ゼラチンシルバープリント
第2章 生活の風景					
11	ハロルド・カズノー	キャッスルリー街 (原題:Castlereagh Street, Sydney)	1917(大正6)年頃	33.9×29.4	ゼラチンシルバープリント
12	石田喜一郎	延び行く街(原題:Growing City)	1923(大正12)年	26.4×33.9	プロムオイルプリント
13	石田喜一郎	街角(原題:The Corner)	1923(大正12)年	32.3×24.5	プロムオイルプリント
14	石田喜一郎	裏通り(原題:An Alley)	1923(大正12)年	19.2×20.7	プロムオイルプリント
15	鍵山一郎	サンシャイン&シャドウ (原題:Sunshine&Shadow)	1926(大正15/昭和元) 年	30.4×23.4	プロムオイルプリント
16	鍵山一郎	動く影(原題:SHADOW-PLAY)	1926(大正15/昭和元) 年	25.9×30.7	ゼラチンシルバープリント
17	石田喜一郎	橋の連作 其の二	1923(大正12)年頃	22.7×29.5	ゼラチンシルバープリント
18	南薫造	橋	1909(明治42)年頃	23.5×32.5	水彩・紙
19	大田黒元雄	作品名不詳 手製作品集(無題)より	1921(大正10)年頃	17.1×13.4	ゼラチンシルバープリント
20	福原信三	対話 作品集「巴里とセーヌ」の8	1913~21 (大正2~10)年	24.5×18.4	ゼラチンシルバープリント
21	村林忠	福原信三先生後姿	1930年代	32.3×40.0	ゼラチンシルバープリント
22	石田喜一郎	清掃	1925(大正15)年	22.7×28.9	ゼラチンシルバープリント
23	南薫造	マドラス	1916(大正5)年頃	24.4×15.8	水彩・紙
24	南薫造	KANDY	1916(大正5)年頃	24.0×15.8	水彩・紙
25	南薫造	中国風景	1939(昭和14)年頃	34.5×25.7	水彩・木炭・紙
26	南薫造	運河沿いの家	1939(昭和14)年頃	24.0×32.6	水彩・紙
27	南薫造	レースカーテンのある部屋	制作年不詳	26.5×36.5	水彩・厚紙
28	大田黒元雄	作品名不詳 手製作品集(無題)より	1921(大正10)年頃	19.0×14.2	ゼラチンシルバープリント
29	松永(佐藤)田鶴江	作品名不詳	1938~39 (昭和13~14)年	29.7×25.3	ゼラチンシルバープリント
30	有田四郎	子等の育った家	1942(昭和17)年	15.0×19.0	エッチング・紙
31	南薫造	瀬戸の春	1948(昭和23)年頃	31.0×40.0	油彩・カンヴァス
32	掛札功	大正12年9月	1923(大正12)年	31.5×31.5	ゼラチンシルバープリント
33	南薫造	大震災東京スケッチ 駿河台	1923(大正12)年	24.0×32.5	水彩・紙
34	石田喜一郎	錦町河岸	1925(大正14)年	39.5×59.6	プロムオイルプリント
第3章 知っている(かもしれない)風景					
35	村林忠	柵	1937(昭和12)年	37.5×27.5	ゼラチンシルバープリント
36	中田幾久治	渋谷川	1965(昭和40)年頃	40.0×31.6	鉛筆・紙
37	掛札功	お茶の水	1921(大正10)年頃	37.0×20.5	ゼラチンシルバープリント
38	掛札功	帝劇	1921(大正10)年	16.5×20.0	ゼラチンシルバープリント
39	掛札功	三越	1921(大正10)年頃	24.5×16.5	ゼラチンシルバープリント
40	石田喜一郎	丸の内	1928(昭和3)年	23.0×29.5	ゼラチンシルバープリント
41	石田喜一郎	中之島風景	1937(昭和12)年	26.3×36.5	ゼラチンシルバープリント

No.	作者	作品名	制作年	サイズ	材質・技法
42	掛札功	大阪図書館	制作年不詳	17.3×24.8	ゼラチンシルバークラフト
43	掛札功	奈良	1924(大正13)年頃	17.5×24.8	ゼラチンシルバークラフト
44	掛札功	作品名不詳	1925(大正14)年	45.5×21.5	ゼラチンシルバークラフト
45	掛札功	第六 瀬見物プロペラ船 新宮町から瀬八丁まで十里を二時間で遡る	制作年不詳	11.5×15.8	ゼラチンシルバークラフト
46	掛札功	第七 瀬見物プロペラ船中	制作年不詳	10.8×15.8	ゼラチンシルバークラフト
47	掛札功	第九 雨景色 新宮町より瀬八丁へ行く途中	制作年不詳	10.8×16.0	ゼラチンシルバークラフト
48	掛札功	第十 瀬峡雨到 瀬八丁入口	制作年不詳	16.2×11.7	ゼラチンシルバークラフト
49	掛札功	第十一 瀬峡	制作年不詳	16.0×10.8	ゼラチンシルバークラフト
50	掛札功	第十三 瀬ホテル(招仙閣)	制作年不詳	16.0×11.6	ゼラチンシルバークラフト
51	掛札功	第十四 瀬峡 筏師交代	制作年不詳	11.8×16.2	ゼラチンシルバークラフト
52	掛札功	第十七 瀬ホテル別館	制作年不詳	16.0×11.6	ゼラチンシルバークラフト
53	掛札功	第十九 瀬峡 瀬ホテル前プロペラ船乗場	制作年不詳	11.2×15.8	ゼラチンシルバークラフト
54	掛札功	第二十 那智瀧遠望	制作年不詳	11.8×16.2	ゼラチンシルバークラフト
55	掛札功	第二十一 那智瀧(直下四十三丈)	制作年不詳	16.2×11.7	ゼラチンシルバークラフト

第4章 近代化する風景

56	石井柏亭	木場	1914(大正3)年	24.0×18.0	木版・紙
57	曾我尾武治	月島にて	1937(昭和12)年	21.0×36.0	エッチング・紙
58	安井仲治	火力発電所風景	1930(昭和5)年 (2004年制作のモダン プリント)	28.5×37.9	ゼラチンシルバークラフトに オイルメディウム、油絵具を 塗布
59	掛札功	昭和五年九月	1930(昭和5)年	25.0×33.0	ゼラチンシルバークラフト
60	石田喜一郎	作品名不詳	制作年不詳	36.2×23.8	ゼラチンシルバークラフト
61	石田喜一郎	夕景	1936(昭和11)年	27.0×37.4	ゼラチンシルバークラフト
62	村林忠	埋立地風景2	1961(昭和36)年	33.5×40.5	ゼラチンシルバークラフト
63	村林忠	送電線1	1961(昭和36)年	41.2×33.5	ゼラチンシルバークラフト
64	村林忠	造成地	1963(昭和38)年	32.5×39.0	ゼラチンシルバークラフト
65	村林忠	強風	1964(昭和39)年	33.5×39.5	ゼラチンシルバークラフト

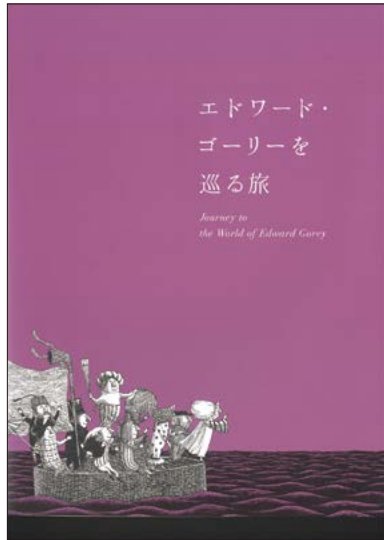
第5章 実在しない風景

66	飯田満佐子	春聲	1986(昭和61)年	118.0×38.0	墨・純本
67	飯田満佐子	野水	1986(昭和61)年	120.0×36.0	墨・純本
68	飯田満佐子	山趣	1982(昭和57)年	109.0×150.0	墨・紙
69	大橋廉堂	倣大痴山水圖	制作年不詳	32.3×42.6	紙本水墨
70	大橋廉堂	山水圖	制作年不詳	38.3×42.4	紙本水墨淡彩
71	遠藤享	SPACE&SPACE / LIGHT BULB 6	1989(昭和64/平成元) 年	45.0×45.0	オフセットリトグラフ・紙
72	工藤甲人	冬の蝶	制作年不詳	40.0×31.0	紙本着彩
73	橋本文良	Table Top Suite Version 2 (机上組曲 第2編)	1987(昭和62)年	67.0×99.0	シルクスクリーン・紙
74	岡田正二	心象風景	1931(昭和6)年頃	17.0×32.0	水彩・コラージュ・紙
75	岡田正二	心象風景	1931(昭和6)年頃	17.0×32.0	水彩・コラージュ・紙
76	岡田正二	漁村(舟と浜)	1968(昭和43)年以降	24.0×27.0	水彩・紙
77	岡田正二	鳥と街(ピンク)	1968(昭和43)年以降	38.0×29.0	水彩・紙

・ 出展作品はすべて渋谷区立松濤美術館の所蔵品です。

Ⅲ 展覧会カタログ・関連書籍 等

令和5 (2023) 年度



特別展『エドワード・ゴーリーを巡る旅』

21.0×28.0cm

全143p、図版と作品解説:120p

「不幸な子供－ゴーリー氏の町から」(グレゴリー・ヒスチャック
翻訳:柴田元幸)

「共生・暴力・シャーマン－ゴーリーと動物」(グレゴリー・ヒス
チャック 翻訳:柴田元幸)

「ステップを踏む エドワード・ゴーリーと芸術という名のダン
ス」(グレゴリー・ヒスチャック 翻訳:柴田元幸)

「愛書狂ゴーリー」(河村錠一郎)

略年譜(編:柴田勢津子)

出展作品一覧

出展書籍一覧



特別展『私たちは何者？ ボーダレス・ドールズ』

25.7×18.3cm

全167p、図版と作品解説:130p

「人形の「リアル」を巡って－ラブドール、アクリルスタンドと
『押絵と旅する男』」(菊地浩平 白百合女子大学講師)

「ヒトガタ雛と神像雛」(林直輝 日本人形文化研究所所長)

「近代日本彫刻史と人形」(田中修二 大分大学教授)

「人形は女の子のモノなのか？－ジェンダーの視点からみた人形
の歴史」(吉良智子 日本女子大学学術研究員)

「私たちは何者？」(野城今日子 渋谷区立松濤美術館学芸員)

Column1 「戦争と人形」(平泉千枝 渋谷区立松濤美術館学芸員)

Column2 「医学教育と人形」(野城今日子)

Column3 「マネキン」(平泉千枝)

作品リスト

作家解説

参考文献



特別展『杉本博司 本歌取り 東下り』

29.0×23.3cm

全225p、図版と作品解説:190p

「本歌取り 東下り 暗喩としてのアート」(杉本博司)

「《法師物語絵巻》追考」(土谷真紀 お茶の水女子大学准教授)

「古典芸能と古美術における本歌取りの面白さ-「本歌取り 東下り」展で杉本流本歌取りを読み解く」(平塚泰三 前渋谷区立松濤美術館学芸係長/大倉集古館学芸部長)

「杉本博司と「本歌取り」」(大平奈緒子 渋谷区立松濤美術館学芸員)

「自画像にみる作家像:杉本博司の仮面」(西美弥子 渋谷区立松濤美術館学芸員)

「現実世界を反転させる幻影、杉本博司、そして白井晟一」(飯田高誉・前渋谷区立松濤美術館副館長/スクールデレック芸術社会学研究所所長)



特別展『「前衛」写真の精神：なんでもないものの変容 瀧口修造・阿部展也・大辻清司・牛腸茂雄』

25.6×18.0cm

全243p、図版と作品解説:175p

「雑誌『フォトタイムス』にはじまる-瀧口修造、阿部展也と大辻清司-」(大日方欣一 写真/映像研究、九州産業大学芸術学部教授)

「あくなき越境の射程-遠ざかる主義の時代の地平から」(松沢寿重 新潟市新津美術館館長)

「学生の頃」(畠山直哉 写真家)

小論

「はじまりのアジェ」(八木宏昌 富山県美術館)

「阿部展也、美術作品を撮る」(上池仁子 新潟市美術館)

「『フォトタイムス』における阿部展也の写真表現」(上池仁子)

「「前衛写真協会」誕生とその時代、その周辺-「前衛写真座談会」をきっかけに」(庄司真汀 千葉市美術館)

「大辻清司、阿部展也の演出を撮る」(上池仁子)

「大辻清司の存在論のありか-「APN」前後の動向を手がかりとして」(藁科英也 千葉市美術館)

「『文房四宝』-モノとスナップのはざままで」(木原天彦 渋谷区立松濤美術館)

「私の解体-「なんでもない写真」」(木原天彦)

「桑沢デザイン研究所にて」(児矢野あゆみ 新潟市美術館)

「日常を撮ること」(児矢野あゆみ)

「『SELF AND OTHERS』(1977)」(児矢野あゆみ)

「紙上に浮かび上がるかたち 牛腸茂雄と瀧口修造」(児矢野あゆみ)

「『見慣れた街の中で』(1981)」(児矢野あゆみ)

年譜
主要参考文献目録
作家解説
作品リスト



「2024 松濤美術館公募展」

25.7×18.2cm

全32p、カラー図版:27p

ごあいさつ

「審査を終えて」(審査委員長 岡部友子)

「新たな分野を交えた審査にあたって」(審査委員 鈴木のぞみ)

「2024年松濤美術館公募展審査の所感」(審査委員 村岡貴美男)

入選作品目録

2024松濤美術館公募展応募・入選状況

IV 館蔵品貸出状況

作家名	作品名 ()内は「渋谷区立松濤美術館所蔵品目録Ⅱ」の番号	展覧会名	貸出先	会期	貸出期間
麻生三郎	《酒びんとぱん》(油1)	麻生三郎展 三軒茶屋の頃、 そしてベン・シャーン	世田谷美術館	2023年 4月22日～ 6月18日	2023年 4月13日～ 6月21日
安井仲治	以下の通り、全29点	生誕120年 安井仲治 僕の大切な写真	愛知県美術館	2023年 10月6日～ 11月27日	2023年 9月23日～ 2024年 4月19日
			兵庫県立美術館	2023年 12月16日～ 2024年 2月12日	
			東京ステーション ギャラリー	2024年 2月23日～ 4月14日	

- 1 《或る船員の像》(写575)
- 2 《静物》(写576)
- 3 《雨もよひ》(写578)
- 4 《(童女スケッチ)》(写579)
- 5 《(農夫喫煙)》(写580)
- 6 《路傍閑語》(写581)
- 7 《(童女スケッチ)》(写582)
- 8 《子供》(写583)
- 9 《馬場町》(写584)
- 10 《平野町》(写586)
- 11 《(警官)》(写589)
- 12 《工事場》(写590)
- 13 《検束》(写592)
- 14 《メーデーの写真》(写594)
- 15 《海辺》(写600)
- 16 《ばせを》(写601)
- 17 《海濱》(写609)
- 18 《微風》(写614)
- 19 《「どん底」》(写615)
- 20 《アクター》(写616)
- 21 《男》(写617)
- 22 《球のある構図》(写620)
- 23 《魚》(写621)
- 24 《蝶》(写622)
- 25 《モニュメント》(写623)
- 26 《白衣勇士》(写632)
- 27 《地上》(写634)
- 28 《風景》(写635)
- 29 《強い葉と枯れる草》(写636)

V 教育普及

1 講演会

専門家や関係者を招き、各特別展の展覧内容に関連した講演会を開催。

令和5(2023)年度実績

期日	テーマ	講師(経歴は当時のもの)	参加者
4月22日(土) 午後2時～	うろんな絵本作家 エドワード・ゴッリー	柴田元幸(翻訳者、東京大学名誉教授)	58人
10月29日(日) 午後2時～	杉本博司の四方山話	杉本博司	72人
1月13日(土) 午後2時～	大辻先生と牛腸さんの時代	潮田登久子(写真家)、児玉房子(写真家) 聞き手:木原天彦(本展担当学芸員)	72人

2 美術教室

区内在住、在勤、在学者を対象に絵画の実技指導を行う。

令和5(2023)年度実績

教室	講師	期間・回数	曜日・時間	参加者 (応募者)
油絵・アクリル画教室	原良介	7月6日～8月10日・5回	木曜日・午後2時～4時	9人(11)
パステル画教室	黒坂祐	7月7日～8月4日・5回	金曜日・午後2時～4時	11人(14)
子ども美術教室	人形劇団プーク	8月18日、19日・2回	金、土曜日・ 午後2時～4時	金:9人(21) 土:10人(14)
木版画教室	内山良子 (助手:磯上尚江)	1月4日～2月1日・5回	木曜日・ 午前11時～午後1時	12人(16)
水彩画教室	武政朋子	1月5日～2月2日・5回	金曜日・午後2時～4時	12人(21)

3 コンサート

令和5(2023)年度実績

実施日	コンサート名	出演者	演奏曲	参加人数
12月17日(日) ①午前11時～ ②午後3時～	「なんでもない」音楽—電子音響 音楽のひとつ	佐藤亜矢子(企画・構成・ 出演、作曲家・音楽家) 渡辺愛(出演、作曲家・ 音楽家)	環境音を使ったサウンド インスタレーション。展 示室で行われたコンサ ートで、入館者は誰でも聴 くことができた。	①53人 ②75人

4 ギャラリートーク

令和5(2023)年度実績

実施日	展覧会名	参加者
4月14日(金)	エドワード・ゴッリーを巡る旅	57人
4月23日(日)	〃 人数多数のため、B2ホールでの着座式ピンポイントトークに切り替え	110人
5月20日(土)①	〃 人数多数のため、B2ホールでの着座式ピンポイントトークに切り替え	102人
5月20日(土)②	〃 1回目で収容しきれなかった方のために午後3時から2回目開催	7人
7月30日(日)	私たちは何者？ ボーダレス・ドールズ ピンポイントトーク「肉体のリアルは人形のリアルか—生人形、マネキン、現 代美術まで」	65人
8月11日(金・祝)	〃 ピンポイントトーク「呪って、守って、愛して♡ 人形は人間？—呪詛人形、 お雛様、現代美術まで」	78人
8月26日(土)	〃 ピンポイントトーク「彫刻と人形のただならぬ関係」	62人
9月29日(金)	杉本博司 本歌取り 東下り	42人
10月14日(土)	〃	58人
10月22日(日)	〃	66人
12月8日(金)	「前衛」写真の精神：なんでもないものの変容 瀧口修造・阿部展也・大辻清司・ 牛腸茂雄	24人
1月20日(土)	〃	27人
3月1日(金)	サロン展 渋谷区立松濤美術館所蔵 土地の記憶と記録 風景を巡る旅	5人
3月10日(日)	〃	8人

5 展覧会関連イベント

令和5(2023)年度実績

実施日	イベント名	出演者	参加者
9月18日(月・祝) 午後2時～	Noh Climax上映×スペシャルトーク	杉本博司 大島輝久(能楽師 シテ方喜多流職分) 足立寛(公益財団法人小田原文化財団)	60人
①12月3日(日) 午前10時30分～ ②12月3日(日) 午後2時～ ③1月6日(土) 午後2時～	佐藤真監督『SELF AND OTHERS』 上映会		①51人 ②47人 ③46人
12月16日(土) 午後2時～	写真ワークショップ 渋谷に撮りたいものはあるのしょうか?	木村和平(写真家)	10人
1月21日(日) 午後2時～	特別講座 「前衛」写真の時空間	木原天彦(本展担当学芸員)	46人

6 建築ツアー

白井晟一設計の当館内を建築に関する説明を聞きながら見学します。

令和5(2023)年度実績

実施日	参加者
4月14日(金)	19人
4月21日(金)	22人
4月28日(金)	21人
5月5日(金・祝)	60人(2グループ合計)
5月12日(金)	49人(2グループ合計)
5月19日(金)	62人(2グループ合計)
5月26日(金)	89人(2グループ合計)
6月2日(金)	22人
6月9日(金)	45人(2グループ合計)
7月7日(金)	15人
7月14日(金)	10人
7月21日(金)	2人
7月28日(金)	14人
8月4日(金)	12人
8月11日(金・祝)	24人
8月18日(金)	24人
8月25日(金)	24人
9月22日(金)	11人
9月29日(金)	20人
10月6日(金)	35人
10月13日(金)	21人
10月20日(金)	40人
10月27日(金)	50人(2グループ合計)
11月3日(金・祝)	52人(2グループ合計)
11月10日(金)	32人(2グループ合計)
12月8日(金)	10人
12月15日(金)	8人
12月22日(金)	6人
1月5日(金)	12人
1月12日(金)	14人
1月19日(金)	4人
1月26日(金)	8人
2月2日(金)	12人
3月2日(土)	26人

時間は3月2日を除き各日午後6時～。3月2日は午後2時～

VI 入館状況

令和5(2023)年度実績

展覧会名	期 間	入館者数	1日平均 入館者数
エドワード・ゴッリーを巡る旅	4/8(土)～ 6/11(日) 56日間	42,033人	751人
私たちは何者? ボーダレス・ドールズ	7/1(土)～ 8/27(日) 50日間	11,785人	236人
杉本博司 本歌取り 東下り	9/16(土)～11/12(日) 50日間	21,509人	430人
「前衛」写真の精神:なんでもないものの変容 瀧口修造・阿部展也・大辻清司・牛腸茂雄	12/2(土)～ 2/4(日) 51日間	8,966人	176人
2024 松濤美術館公募展			
サロン展 渋谷区立松濤美術館所蔵 土地の記憶と記録 風景を巡る旅	2/27(火)～ 3/16(土) 17日間	2,338人	138人

令和5(2023)年度実績

4月7日(金)	特別展『エドワード・ゴッシーを巡る旅』展特別披露
4月8日(土)	特別展『エドワード・ゴッシーを巡る旅』展始まる
4月22日(土)	講演会:「うろんな絵本作家 エドワード・ゴッシー」 講師:柴田元幸(翻訳者、東京大学名誉教授)
5月12日(金)	理事会
5月30日(火)	評議員会
6月11日(日)	特別展『エドワード・ゴッシーを巡る旅』展終了
6月30日(金)	特別展『私たちは何者? ボーダレス・ドールズ』展特別披露
7月1日(土)	特別展『私たちは何者? ボーダレス・ドールズ』展始まる
8月27日(日)	特別展『私たちは何者? ボーダレス・ドールズ』展終了
9月15日(金)	特別展『杉本博司 本歌取り 東下り』展特別披露
9月16日(土)	特別展『杉本博司 本歌取り 東下り』展始まる
10月29日(日)	講演会:「杉本博司の四方山話」 講師:杉本博司
11月12日(日)	特別展『杉本博司 本歌取り 東下り』展終了
12月1日(金)	特別展『「前衛」写真の精神:なんでもないものの変容 瀧口修造・阿部展也・大辻清司・牛腸茂雄』展特別披露
12月2日(土)	特別展『「前衛」写真の精神:なんでもないものの変容 瀧口修造・阿部展也・大辻清司・牛腸茂雄』展始まる
1月13日(土)	講演会:「大辻先生と牛腸さんの時代」 講師:潮田登久子(写真家) 児玉房子(写真家)
2月4日(日)	特別展『「前衛」写真の精神:なんでもないものの変容 瀧口修造・阿部展也・大辻清司・牛腸茂雄』展終了
2月14日(水)	理事会
2月25日(日)	「2024 松濤美術館公募展」授賞式
2月27日(火)	「2024 松濤美術館公募展」始まる サロン展『渋谷区立松濤美術館所蔵 土地の記憶と記録 風景を巡る旅』始まる
2月28日(水)	評議員会
3月16日(土)	「2024 松濤美術館公募展」終了 サロン展『渋谷区立松濤美術館所蔵 土地の記憶と記録 風景を巡る旅』終了
3月30日(土)	理事会
3月31日(日)	評議員会

VIII 組織

公益財団法人渋谷区文化・芸術振興財団

当館は、渋谷区の委託を受けて、公益財団法人渋谷区文化・芸術振興財団が運営している。企画展等に関わる諸事業は、機敏でしかも柔軟な経理活動が伴わなければ効果的に推進することが難しいため、行政の公会計制度から独立した財団の財務会計によって計画的な事業を推進することで区民文化の振興を目指している。財団は区の出資により設立され、独自の組織と所要経費をもち、開館時間、休館日、入館料等の美術館の基本的利用条件の決定を除き、施設の維持管理、展覧事業及び文化活動の全般にわたって委託されている。



※令和6年3月31日現在

IX 利用案内

開館時間

〔特別展〕

午前10時～午後6時

* 金曜日は午後8時まで開館

* 最終入館は閉館30分前まで

〔公募展・サロン展〕

午前9時～午後5時

* 最終入館は閉館30分前まで

休館日

毎週月曜日（祝日は除く）

国民の祝日の翌日（土・日曜日は除く）

年末年始（12月29日～1月3日）

展示替期間

入館料

展覧会毎に異なります。

* 団体（10名以上）のお客様が同時に入館される場合及び渋谷区民の入館料は、2割引となります。

* 障がい者とその付添の方各1名は無料です。入館の際に障がい者手帳等をご提示ください。

* 金曜日に入館される渋谷区民の方は無料です。入館の際に住所のわかるものをご提示ください。

* 土・日曜日、休日、夏休み期間中、小中学生は無料です。

案内図



主要交通機関

京王井の頭線

ハチ公バス

JR山手線・東京メトロ・東急電鉄

* 駐車場はありません。

神泉駅下車 徒歩5分

渋谷駅より「丘を越えてルート（上原・富ヶ谷ルート）」にて
「松濤美術館入口」下車 徒歩5分

渋谷駅ハチ公口下車 徒歩15分

渋谷区立松濤美術館 紀要 第2号

BULLETIN of The Shoto Museum of Art No.2

研究ノート1

あこガレのエミール・ガレ

一戦後日本における「日本人のガレ好き」と社会的背景:再考

野城今日子(渋谷区立松濤美術館 学芸員)

2024(令和6)年度、当館では「没後120年 エミール・ガレ展 奇想のガラス作家」を開催した。本展は美術史家の鈴木潔氏を監修者として迎え、フランスのガラス工芸家であるエミール・ガレ(1846~1904)の生涯と作品を国内コレクターの所蔵品で紹介した巡回展であった^{註1}。これまでのガレ展では出品される機会の少なかった貴重な個人コレクションをご覧いただく機会であったためか、非常に多くのお客様にご来館いただいた。

かつて、由水常雄氏が1977(昭和52)年に刊行した『エミール・ガレ その人と作品』(瑠璃書房)の中において、「日本人のガレ好き、といわれる。なぜそれほどに、日本人はエミール・ガレの作品を好むのか、と近頃よく外国人に問われる」(2頁)と述べているが、本展はまさしく「日本人のガレ好き」を代表する個人コレクターたちによる蒐集品に着目した展覧会であった。これらは、いわゆるミュージアムピースではなく、個人で親しまれてきたものである。本展は、ガレの作品を蒐集してきたコレクターたちの層の厚さが改めて示された展示になったとともに、その秘蔵の作品をこの目で確認したいという日本全国のガレ愛好家たちに支えられ、盛況のまま会期を終えることとなった。日本でのガレの人気は衰えることなく、むしろ2024年度は本展以外でも日本各所で没後120年を記念したガレ展が開催されており、そのムーブメントはさらなる高まりをみせていると考えられよう^{註2}。

ところで、著者は本展図録に「日本人のガレ好き」と時代背景」というコラムを寄せた。日本においてガレの認知が広がり、「日本人のガレ好き」が増加した昭和時代の社会背景を簡潔に記した。本稿では、このコラムを下敷きとし、戦後の日本社会に発生し、定着したこの現象について、改めて考察していきたい。具体的には、コラムでも取りあげた戦後日本の経済状況や生活環境の変化をより詳しく整理しつつ、さらに百貨店や美術館の動向を整理しながら、ガレの作品が受け入れられていく日本の社会的状況についてまとめる。

戦前から戦後におけるエミール・ガレの認知度とその変容

日本におけるガレの人気の源流については、すでに花井久穂氏によって研究されている。それによると、ガレは明治時代にすでに『大日本窯業協会雑誌』などに紹介こそされているものの、戦前まではあまり日本では大衆には知られている存在ではなかったようだ^{註3}。また、明治時代から大正時代にかけて日本で制作されたガラス作品の多くは、すでに江戸時代から日本に存在していたビードロや切子の技法を応用したものが多かったという。当然、西洋からの技術を取り入れてもいるが、多くはイギリスからの技術を参考にしていたため、実際の制作の現場におけるガレの影響は、遅れてやってきたとのことである^{註4}。1939(昭和14)年にも雑誌『住宅と庭園』で図版付きで取りあげられており、「幻想的な意匠の美を以て彼はアール・ヌーヴォーの工芸家中第一位に推されてゐる」とガレを紹介している資料があるものの、多くの作家の中のひとりとして語られている^{註5}。いずれにしろ、ガレの熱烈な人気を物語る資料が戦前には少ない傾向にあると考えられよう。しかし、戦後になると、その状況は一変する。先述の由水氏著『エミール・ガレ その人と作品』では、日本国内の個人コレクターたちがすでに上質なガレ作品を所蔵していることが紹介されている^{註6}。戦後から同書刊行の1977年までの20年ほどで熱心なガレ愛好家が増えたこと、あるいは、ガレの作品をコレクションしている旨を表明する人が増えたことがわかる。

この昭和時代に急激に広がった流行のきっかけについて、花井氏は1964(昭和39)年の海外渡航の自由化と1970(昭和45)年の大阪万国博覧会の影響を指摘している^{註7}。これらは、ガレの作品が多くの人に認知され、日本に輸入されるきっかけとなったという。それとともに、市井の個人コレクターが自宅にガレの作品を受け入れる過程——つまり、各個人の経済的基盤と文化的な素地の形成、住宅空間の整備がされていく様相も見逃せないのではないか。次章では、高度経済成長期と、それに伴い「応接間」をはじめとする洋風文化が市井の人々の憧れの的となった現象について注目したい。

文化的ステータスとしてのエミール・ガレ作品

海外渡航の自由化と大阪万国博覧会開幕以前の1950年代にガレの作品を洋風住宅で飾ることをいちやく扱ったのは、1958(昭和33)年の娯楽雑誌『平凡』と、イラストレーターで雑誌編集者の中原淳一が「美しい暮らし」をコンセプトにした雑誌『それいゆ』であったとみられる。この2つの記事では、二枚目俳優、根上淳氏がコレクションしているガレ作と称された作品が掲載されている。特に『平凡』では、渋谷区代々木に新築された根上氏の自宅紹介がされており、庭付きの大きな洋風の家、洋犬、アメリカ製の愛車とともに「応接間」を飾るガレの作品が登場する^{註8}。また、『それいゆ』【図1】でも根上氏がガレのコレクションを部屋に飾る様子を取りあげている。光に照らされ、幻想的に輝く多数のガラスの壺が見開きに大きく掲載されており、思わずうっとりとして見とれてしまうような情景である^{註9}。このように、美術雑誌ではなく娯楽雑誌やファッション誌において、スターがおくる洋風の生活の美しいイメージを補強するひとつの要素としてガレの作品が登場していることは興味深い。



【図1】「壺のはなし—根上淳さんのコレクションから—」
『それいゆ』51号 1958年 236—237頁

この根上氏所蔵のガレ・コレクションが紹介された時期は、いうまでもなく高度経済成長期であった。日本の経済が急激に成長していく中で、文化的な環境や心のあり方も変化していったことが、1973(昭和48)年の「国民生活に関する世論調査」で明らかとなっている。同調査では、「お宅の生活の程度は、世間一般からみて、どうですか」という問いに対し「中の上」、「中の中」、「中の下」を選択した人が全体の90%を超えたというデータがある^{註10}。この総じて自身が「中流階級」に属するという意識は、単に経済状況のみを示しているわけではなく、文化的なライフスタイルが送れているか、という点も重要なポイントであったようだ^{註11}。この「中流階級」のイメージについて岸本重陳氏は『「中流」の幻想』において、戦前期の「中流性をイメージするうえでひとつの重要な要素」となりえたものが「応接間」であったと述べている^{註12}。この「応接間」という空間は、明治時代から大正時代にかけて依然として和風が主流であった都市の住宅建築の中で、ソファセットを置くだけでも比較的簡単に洋風化することが可能な部屋という認識があったようだ^{註13}。岸本氏は、この洋風の部屋である「応接間」と豊かな経済環境が結びつくイメージが戦後も「残像性」を帯びたことで引き継がれた可能性を示唆している^{註14}。

この住宅に「応接間」を設けること、そして部屋を洋風にすることが文化的アドバンテージとなる当時の社会の動向を踏まえると、「応接間」があるだけではなく、家や車、愛犬までもが米国やヨーロッパの文化を基調としている根上淳氏の生活は、当時の憧れのライフスタイルが視覚化されている好例といえるだろう。そして、「応接間」を飾る大量のガレの写真は、本物の作品を見る機会の少ない『平凡』や『それいゆ』の読者であった若者を感化し、豊かな生活や社会的成功を象徴するひとつの記号として伝わった可能性が高いのではないだろうか。というのも、さらに時代が進み、これらの雑誌の読者たちが青年、中年になった1970年代後半から1980年代になっても、骨董雑誌でガレの家具が部屋に置かれる様子が再び取りあげられているほか^{註15}、経済誌などでも実業家や文化人がガレの作品蒐集をしている様子とともに、その文化的な生活ぶり取材した記事が数多く掲載されていく^{註16}。さらには、作品の所有にとどまらず、フランス、パリ装飾美術館へも足を運び、ガレをはじめとするガラス作品を堪能した愛好家のほか^{註17}、フランス出張の合間にガレの作品を蚤の市で購入する人を扱った記事なども掲載された^{註18}。つまり、所有者の生活の豊かさや社会的な成功をあらわすひとつの要素としてガレの作品が紹介され続けたのである。

個人の生活水準の高さをガレの作品が示していく一方で、実際に作品を手に入れるための「購入」については興味深い言説がある。ガレの一大コレクターのひとりである開業医の菊地保成氏は、その蒐集の動機について「もちろん絵も陶器も彫刻も興味がありました。しかし、それらのいいものはバカ高く、手が出ないし、真贋の問題もむずかしかったです。ガレには銘が入っていました。そこで手を出したのですが、やはりむずかしいですね」と語っている^{註19}。このように、ガレの作品は憧れの対象である一方で、一部の人々には実際に購入が検討できる価格帯であったことがうかがえる。また、1982(昭和57)年には財務省広報誌に「アール・ヌーボーは買い時」というトピックも掲載されており、「エミール・ガレの花びんは、私のヨーロッパへ来た三年前に比べ二倍近く値上がり

している。」と語られ、資産としての価値が高まっていることもわかる^{註20}。また、鈴木潔氏によれば、1980年代後半から1990年代初頭にかけて日本でおきたバブル景気も追い風となり、アール・ヌーヴォー作品の価格が上昇していく傾向にあったという。そして、「高値でガレを買い漁る日本人バイヤーへの羨望も入り混じった「日本人のガレ好き」という言葉がささやかれ、数多くの名品が海外から招来され」と述べている^{註21}。「日本人のガレ好き」という言葉自体、当時の日本の経済的状況を前提とした言葉であったのだろう。

ここまでをまとめると、1950年代に豊かな生活の中にあるガレの作品というイメージが誕生し、このイメージが繰り返されることで、ガレの作品が豊かな生活、経済的、社会的な成功を象徴するものとなっていったとみられる。こうしたイメージのバックボーンには、日本の住宅の洋風化が進み、文化的な生活を送ることがステータスとなっていく高度経済成長期の日本人の動向と、それを実現できる各個人の経済状況の成熟が大きく影響していると考えられる。

上記のように個人でガレを所有し、楽しむ人々が増えていく傾向とともに、もうひとつ重要なのは、1980年代前後から百貨店や美術館で開催された展覧会でガレの作品が紹介されたことで、個人コレクターが担ってきた蒐集や公開という役割が百貨店や美術館へ移行されていくことである。次章では、ガレの知名度を個人から大衆へ広げる役割を果たした美術展覧会の開催や美術館の創設について注目したい。

百貨店の文化事業と美術館の開館ブーム

上記のように1950年代から1970年代にはすでに熱心なガレのコレクターが存在したものの、ガレの作品、あるいはガレそのものの認知度が高まっていったのは少しあとのこととなる。前述の菊地氏が「ガレに興味を感じ十数年になります、蒐めはじめた頃およそ日本でみられたのは工房作でした」と語っているように^{註22}、当時の市場で多く流通していた作品は、ガレが亡くなった1904年以降から1930年まで存続した、いわゆる「ガレ商会」による工房作であったようである。もちろん、一部のコレクターは、早くからガレが生前に関わった作品を手に入れていたとみられるが、ガレの生涯における仕事の全貌を大衆が目にしたのは、百貨店による展覧会であった。【表1】には、1970年代から現在までおこなわれたガレの単独展覧会をまとめた。

そもそも百貨店の文化事業自体、知的好奇心を満たしたい人々のための「都市の文化的なインフラ」としての役割を担っていたという。こうした人々の動向も高度経済成長期の中で生まれたものであった。当時の百貨店は、日本の古美術品からサブカルチャー、あるいは子ども美術展や昆虫展まで、幅広い分野の展覧会を開催しており、その中で海外の近現代の美術展などもおこなわれていた^{註23}。例えば、渋谷西武では、1969(昭和44)年に「ゴッゲン展」(8月23日～10月1日)、1973年には「印象派100年 光と色彩の賛歌 モネ展」(3月30日～5月15日)など、著名な海外作家の展覧会を開催している。こうした動向の中で、ガレの紹介もされた。特に、1970年代から1990年代にかけて百貨店では頻りにエミール・ガレ展が開催された。1971(昭和46)年の「エミール・ガレー展」では、すでに100点におよぶ作品が展示されていたようだが^{註24}、特に重要なのは、1980(昭和55)年に三越美術館(東京日本橋)で開催された「エミール・ガレ展」だろう。この展覧会は「世界で初めての[本格的な]エミール・ガレ展」と題し、パリ装飾美術館の主任研究官、イヴォンヌ・ブリュナメル氏が厳選したガラス器約84点、陶磁器約10点、家具約6点が展示された^{註25}。出品作品は、パリ装飾美術館、デュッセルドルフ美術館などを中心とした海外美術館の所蔵品と日本国内のコレクター所蔵品であった。中には、エナメル彩で鯉の文様を施した《鯉魚文花瓶》(1878年、パリ装飾美術館蔵)をはじめとする晩年の名品などもあり、まさにガレの作品の変遷を追うことができる展覧会であったようである。この展覧会はその後、名古屋のオリエンタル中村百貨店、三越大阪支店を巡回した。その他にも、毎年全国の百貨店でガレの展覧会が開催されており、ガレの認知度が広まったきっかけは、百貨店のはたきかけであったことが理解できよう。

このガレ展をはじめとする百貨店での展覧会によって、1970年代にはガレの認知度がアートファンたちの間で高まっていくが、やがて百貨店の大規模展覧会事業自体が下火になっていく。1980年代に近づくとそれと交代するように、美術館創立のブームが到来した。ガレなどを中心としたガラス工芸品をコレクションの中核にすえた北海道立近代美術館が1977年、ガレの代表作《ひとよ草》(1904年頃)をはじめとする実業家の北澤利男氏の蒐集品がそろった北澤美術館が1983年に開館され、名品がさまざまな館の常設展で鑑賞できるようになった。また、先に

登場した菊地保成氏のコレクションが1994年にサントリー美術館に収蔵されたほか、今回、本展覧会でも借用がなかったポーラ美術館が2002年に、ヤマザキマザック美術館が2010年に開館するなど、美術館で上質なガレの作品を目にする機会が80年代から2000年代にかけて増加していく。その中で、多くが個人や会社による私立美術館であることは、実業家たちが熱心にコレクションをおこなってきた証でもあるのだろう。

さらに、所蔵館以外の美術館でも1980年代になるとガレの展覧会を次々と開催していく。1990年代まではいわゆる名品展やガレの生涯を紹介した展覧会が多い傾向があるが、2000年代以降は、展覧会ごとでさらにテーマを絞り、ガレについての調査研究を深めていったことがわかる。美術館では、さまざまな視点からガレの作品を語ることで、愛好家も新しい発見がえられる展覧会を開催してきた。

このように1970年代後半から現在まで、百貨店や美術館という公共性の高い施設において、誰もがガレの作品を楽しめる環境が整備されていった。個人で楽しまれていたガレの作品を大衆へ広め、その認知度を高めたのは百貨店や美術館だったと考えられる。

【表1】エミール・ガレ単独展 主要展覧会一覧

1971年	7月21日～25日	高島屋(日本橋)	近代フランス ガラスの巨匠 エミール・ガレー展
1973年	4月3日～8日	高島屋(大阪)	エミール・ガレー展
1974年	5月9日～14日	高島屋(大阪)	エミール・ガレー名作展
1976年	8月26日～31日	松坂屋(名古屋)	エミール・ガレー小品展
1977年	6月9日～14日	大丸(京都)	エミール・ガレ作品展
1978年	9月9日～25日	神奈川県民ホール	エミール・ガレのガラス工芸展
1978年	6月8日～8月6日	北海道立近代美術館	ガラスの美術展 炎の凍結 エミール・ガレとナンシー派
1980年	1月29日～2月11日	三越美術館(東京日本橋)	
1980年	2月15日～27日	オリエンタル中村百貨店(名古屋)	【巡回展】エミール・ガレ展
1980年	3月4日～16日	三越(大阪)	
1982年	3月31日～4月6日	松坂屋(名古屋)	エミール・ガレ展
1983年	3月31日～4月5日	松坂屋(名古屋)	エミール・ガレ展
1984年	3月2日～7日	東急(吉祥寺)	エミール・ガレ展
1984年	4月12日～17日	松坂屋(名古屋)	エミール・ガレ展
1984年	7月17日～22日	三越	ガラスの美 エミール・ガレ展
1985年	1月24日～29日	大丸(京都)	エミール・ガレ展
1986年	6月17日～6月22日	三越	エミール・ガレ展
1986年	7月24日～29日	高島屋	エミール・ガレ展
1994年	8月23日～29日	三越	エミール・ガレ展
1997年	10月9日～21日	大丸(神戸)	エミール・ガレ展
2000年	4月28日～6月11日	北海道立近代美術館	
2000年	7月11日～8月27日	サントリー美術館*	
2000年	9月2日～10月15日	下関市立美術館	【巡回展】エミール・ガレ展
2000年	10月28日～12月3日	宮崎県立美術館	
2001年	4月6日～6月10日	ふくやま美術館	
2004年	3月30日～5月16日	サントリー美術館	没後100年記念 エミール・ガレ
2005年	1月22日～4月3日	東京都江戸東京博物館	
2005年	4月12日～5月22日	国立国際美術館	【巡回展】没後100年記念 フランスの至宝 エミール・ガレ展
2005年	6月18日～8月31日	岐阜県現代陶芸美術館	【巡回展】エミール・ガレ 創造の軌跡展 没後100年記念 フランスの至宝
2005年	9月16日～11月23日	MOA美術館	
2006年	4月15日～5月14日	郡山市立美術館	生誕160年 詩情の造形エミール・ガレ展
2008年	3月20日～5月11日	サントリー美術館*	開館1周年記念展 ガレとジャポニスム
2009年	7月18日～9月27日	ふくやま美術館	エミール・ガレ 陶器のジャポニスム-フランスに花開く日本の美-
2009年	9月26日～11月29日	茨城県陶芸美術館	ガラスの植物学者 エミール・ガレ展
2010年	4月17日～5月30日	目黒区美術館	エミール・ガレの生きた時代 近代生活のエレガンス
2010年	9月17日～11月14日	八王子市夢美術館	エミールガレの陶芸 日本への憧れ
2016年	6月29日～8月28日	サントリー美術館*	オルセー美術館特別協力 生誕170周年 エミール・ガレ
2018年	3月17日～7月16日	ポーラ美術館	エミール・ガレ-自然の蒐集
2020年	1月2日～3月8日	茨城県陶芸美術館	ガレの陶芸-世紀末の煌めき 昆虫・植物・ジャポニスム-
2024年	4月6日～6月9日	渋谷区立松濤美術館	【巡回展】没後120年 エミール・ガレ展
2024年	7月7日～11月24日	下瀬美術館	エミール・ガレ没後120年 ガレのある部屋-ジャポニスムからアール・ヌーヴォーへ
2024年	10月12日～12月15日	徳山県立近代美術館	【巡回展】没後120年 エミール・ガレ展
2024年	11月2日～2025年1月26日	富山市ガラス美術館	【巡回展】没後120年 エミール・ガレ:憧れのパリ
2024年	11月22日～12月25日	美術館「えき」KYOTO	没後120年 エミール・ガレ展 美しきガラスの世界
2025年	2月15日～4月13日	サントリー美術館	【巡回展】没後120年 エミール・ガレ:憧れのパリ

*サントリーミュージアム(天保山)にも巡回

まとめ

本稿では、戦後日本の経済状況や生活環境の変化をより詳しく整理しつつ、さらに百貨店や美術館の動向を整理しながら、「日本人のガレ好き」の社会的背景について考察した。

ガレの認知度の高まりや人気の広がりについては、1950年代から1970年代にかけては個人が、1970年代から1980年には百貨店が、そして1980年代から現在まで、美術館がガレを紹介する役割をバトンタッチしながら、その作品の魅力を伝えてきたといえよう。

そうした中で発生した「日本人のガレ好き」という言葉は、単なるガレの人気だけを示したものだけではなく、日本の高度経済成長期やバブル経済といった、好景気を背景として述べられたものであった。また、ガレを所有することが個人の生活の豊かさや社会的な成功を表すようになり、憧れの存在となっていく。そして、個人で楽しまれていたガレの作品が大衆へ広まったきっかけには百貨店での展覧会や美術館の創立が大きな役割を果たしていたことを本稿ではまとめた。

もちろん、ガレの作品にもともと備わっている造形と色彩の魅力と、鈴木氏も述べる「もののあわれ」の精神^{註26}がガレの作品の中になければ、ここまでの大きなムーブメントにはならなかっただろう。しかし、1950年代から現在まである「日本人のガレ好き」という現象の根本的な理由を考えると、エミール・ガレの作品という「モノ」の向こうに日本の大衆がどのようなイメージを投影しているのか、という問題が大きく横たわっている。それは、もはやガレ本人が作品に込めた意図とは異なる、戦後の日本に生きた人々によって編み出された独自のイメージである。本稿ではそのイメージを高度経済成長期やバブル経済の中で生まれた経済的、社会的成功とした。ただし、バブル崩壊を経た現在でもガレの人気は健在であることを鑑みると、それは単に一側面でしかないことは、最後に申し述べておきたい。戦後の日本における美術の受容を考えるためにも重要ともいえるこの問題については、今後より多くの視点で考察されるべきだろう。

【註】

註1 本展は当館と徳島県立近代美術館を巡回した(企画はアートプランニング レイ)。当館では2024年4月6日～6月8日まで開催。徳島会場では「没後120年 エミール・ガレ展 自然を愛したガラス芸術の天才」と題し、2024年10月12日～12月15日まで開催した。

註2 「エミール・ガレ没後120年 ガレのある部屋—ジャポニスムからアールヌーヴォーへ」2024年7月7日～11月24日 下瀬美術館、「没後120年 エミール・ガレ展 美しきガラスの世界」2024年11月22日～12月25日 美術館「えき」KYOTO、「没後120年 エミール・ガレ 憧憬のパリ」2025年2月15日～4月13日 サントリー美術館など

註3 花井久穂「日本のガレ受容をめぐる三つの種子—「日本人のガレ好き」はいつから始まったのか?」『ガラスの植物学者 エミール・ガレ展』(展覧会図録)茨城県陶芸美術館 2009年 145-149頁

註4 岡田譲編「明治・大正のガラス」『日本の美術』37号 1969年 89-96頁

註5 岡村千曳「硝子雑攷」『住宅と庭園』6巻11号 1939年 231-254頁(ガレの紹介は252頁)

註6 由水常雄『エミール・ガレ その人と作品』瑠璃書房 1977年

註7 前掲3 148頁

註8 「根上淳さんの新居」『平凡』14巻10号 1958年 74,75頁

註9 「壺のはなし—根上淳さんのコレクションから—」『それいゆ』51号 1958年 236,237頁。また、ガレ作とは名言がされていないものの、同様の壺が1955年の同誌にも掲載されている(「男の部屋 その1 壺とレコードと白い猫のいる根上淳さんのへや」『それいゆ』36号 1955年 44,45頁)

註10 内閣府「国民生活に関する世論調査(昭和48年2月調査)」(内閣府HP: <https://survey.gov-online.go.jp/index-ko.html> 2003年12月25日最終更新)

註11 満園勇「日本における中流意識の歴史的展開—消費史との関係を中心に—」『歴史と経済』227号 2015年 11-20頁

註12 岸本重陳『「中流」の幻想』講談社 1985年 66頁

- 註13 吉田高子「大正期の住宅改良問題 日本建築協会を中心とした関西の動き」『建築の研究』103号 1994年 6-12頁
- 註14 前掲12、74頁。なお、岸本は「応接間」が実際に設備されていた住宅の割合が戦前期でも多くはないことから、実際には「応接間」の設置が絶対条件ではなかったことを述べている。
- 註15 吉田叡子「りびんぐ骨董考」『The 骨董』第3集 1980年 121-123頁
- 註16 「田村泰次郎」『太陽』17巻10号 1979年 97頁、高原慶一郎「美との出会い エミール・ガレー「静寂」」『プレジデント』17巻1号 1979年 206頁、長谷川嘉彦「ホテル・旅館人国記 奈良県」『月刊 ホテル旅館』19巻8号 1982年 6頁など。それぞれ、作家の田村泰次郎氏、ユニ・チャーム創業者で実業家の高原慶一郎氏、魚佐旅館社長の金子芳文氏がガレの作品を所蔵していることが記されている。
- 註17 太田恵子「独占手記 今日も悲しくとも ナンシイの蝶」『経済界 新年合併特大号』11巻1号 1976年 166-171頁。実業家の太田恵子氏は、大阪ロイヤルホテル内に「グラス・ギャラリー・ナンシイ」を開店するなど、ガレの作品をはじめとするガラス作品の蒐集を精力的におこなった。由水氏もこの見学会に同行していることから、作品の買い付けであった可能性が高い。
- 註18 長谷川誠一「西欧 ヨーロッパ 我が旅の記」『そめとおり』374号 1982年 32-35頁。長谷川誠一氏は京都織商常務理事。
- 註19 菊地保成「エミール・ガレに惹かれて」『藝術新潮』32巻7号 1981年 36頁
- 註20 西村吉正「ヨーロッパで見た日欧経済摩擦(下)」『ファイナンス 財務省広報誌』18巻2号 1982年 33-42頁
- 註21 鈴木潔「エミール・ガレ、象徴的芸術への道程」『没後120年 エミール・ガレ展』(展覧会図録)渋谷区立松濤美術館、徳島県立近代美術館 2024年 115-124頁
- 註22 前掲19
- 註23 志賀健二郎『百貨店の展覧会 昭和のみせもの1945-1988』薩摩書房 2018年 10頁
- 註24 「アーツ エミール・ガレ展」『芸術新潮』16巻29号 1971年 20頁
- 註25 イヴォンヌ・ブリュナメール他編『エミール・ガレ展』(展覧会図録)三越美術館(東京日本橋)ほか 1980年
- 註26 前掲21

研究ノート2

ラスキン、野々宮君、黒田清輝の雲の話 —『空の発見』展余話—

平泉千枝(渋谷区立松濤美術館 学芸員)

青い空の静まり返った、上皮に、白い薄雲が刷毛先で掻き払った痕の様に、筋違に長く浮いてある。

「あれを知っていますか」と云ふ。三四郎は仰いで半透明の雲を見た。

「あれは、みんな雪の粉ですよ。かうやつて下から見ると、些とも動いて居ない。然し、あれで地上に起こる颶風以上の速力で動いてみるんですよ。—君ラスキンを読みましたか」

三四郎は憮然として読まないと答へた。野々宮君はたゞ

「さうですか」と云つた許りである。しばらくしてから、

「此空を写生したら面白いですね。—原口にでも話してやろうかしら」と云つた。三四郎は無論原口と云ふ画工の名前を知らなかつた。

夏目漱石『三四郎』より¹⁾

筆者は本年度、『空の発見』(2024年9月14日-11月10日)という展覧会を企画・担当した。本展は、日本の美術においては近世となるまで「空」が再現的に描かれない、ひいてはこの空間があまり意識されていない、ということの気づきから、空の表現の変遷を追うものだった。このなかで「雲」の描かれ方について考えると、障屏画で定型表現であった「金雲」や、絵巻などで多用された「すやり霞」に代表されるように、本邦においては現実を描写するより、文様的な表現が繰り返されてきたといえる。その後、西洋美術の影響を受けた洋風画や浮世絵に「青空と白雲」の表現が広がり始める近世、本格的な西洋画教育の開始から写実的な空の描写が試みられるようになる近代は、日本の雲の表現の転換期といえよう。

ところで、展覧会を経て、当世風に言うなら、「解像度が上がって」、それまで読み飛ばしていた背景がよく「見えてくる」ことがあった。それが冒頭に引用した著名な近代文学作品、夏目漱石(1867-1916年)の『三四郎』の「雲」をめぐる会話だ。短い文章だが、ここには「雲」をめぐる近代、転換期の文学・美術の様相が凝縮されているのである。展覧会の余話としてここではそれを読み解いてみたい。

『三四郎』の雲の話

場面は、九州から大学入学のために上京した小川三四郎が、知る人のない東京で暮らすことを心配した郷里の母の言いつけで、東京帝国大学理科大学(現・東京大学理学部)の同郷の先輩「野々宮君」こと、野々宮宗八を訪ねるくだりだ。助手として研究に没頭する野々宮と三四郎とはこの時が初対面、そしてともに現在の東京大学の本郷キャンパスを歩きながら、「半透明の雲」を見つめている三四郎に野々宮が声をかけている。ただ、どうしてそれが、「君ラスキンを読みましたか」という、唐突にイギリスの美術評論家ジョン・ラスキン(1819-1900年)を引き合いに出す発言になるのか。野々宮の連想が、この空を写生したら面白いと、わざわざその場にはいない画家である「原口にでも話してやろう」というところまで飛躍するのか。現代の多くの読者が、三四郎ならずとも憮然としてしまうところではないか。

だが、今なら解る。野々宮のセリフは、同じ頃のちょっとした「雲ブーム」ともいべき現象を背景にしたものなのだ。このブームは、当時の日本の知識人がこぞって読んだラスキンの大著『近代画家論(Modern Painters, 1843-1860年)』を発端のひとつにしており、漱石自身も実際に同書を所有していたという²⁾。ちなみにこの野々宮

は、漱石門下の物理学者で文人であった寺田寅彦(1878-1935年)がモデルとなっていると言われている³。では次にそのラスキンの雲の記述について見てみよう。

ラスキンの雲の話

多様な絵画理論や風景画論からなるラスキンの『近代画家論』では、「雲」に関する論にかなりの頁が費やされている。特に日本で影響を与えたのは、第1巻収録の、「空について、人々が一般的にどれほど無知であるか、不思議なほどだ」という書き出しで始まる「大空の真実について」や「雲の真実について(1)-(3)」などの一連の章だった⁴。

「雲の真実について」でラスキンは空を三つの層、すなわち(1)「巻雲(cirrus)」の領域である上層、(2)「層雲(stratus)」の領域である中層、(3)「雨雲(rain-cloud)」の領域の下層に三分類し、それぞれの雲の特徴や色彩などを語る。これを踏まえて絵画中の雲の表現の批評を展開し、古の画家たちの描いた雲は観察不足により、形骸化した誤った描写となっていると述べる。風景表現の巨匠として知られるフランスのクロード・ロランら17世紀の画家たちの雲にさえも「透明性」の欠落という深刻な欠陥があると批判する。ラスキンによれば、今まで顧みられてこなかった上空の領域に注目し、自然観察にもとづいた雲の諧調や透明性を完璧に表現してみせたのは、母国の19世紀の画家ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー(1775-1851年)のみ、となる。もとより『近代画家論』全体が、ターナー称揚という目的を強く持っていた著書であるため、これが「真実」かどうかはひとまず置く。

ただし目の前の「空」がこれまで見過ごされてきた領域であり、そこにある多種多様の「雲」の観察から多くの美的な要素を引き出せると教えるラスキンの論自体は、近代日本の若者たちの心を掴んだ。特筆すべき例として、1900(明治33)年8月、詩人の島崎藤村(1872-1943年)が雑誌『天地人』(第40号)に寄せた随筆「雲」がある⁵。藤村は前年、長野県の小諸に英語教師として赴任したが、随筆は「こぞの四月都を辞して信濃に赴く時、わが行李のうちには近世画家論五巻をも納めたり」で始まる。「近世画家論五巻」とはもちろんラスキンの『近代画家論』のことである。

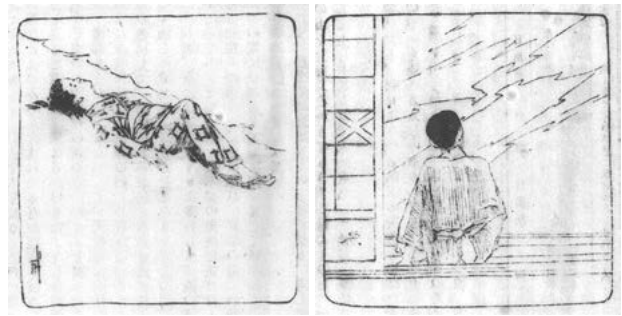
藤村は、つねづねこの『近代画家論』第1巻の「雲を論ずるの四節」を翻訳してその精緻な雲の観察を世間に伝えたいと思っていたが、すでに「久保学士」による訳があることを知ったとも述べる。これは、数カ月前の1900(明治33)年5月に、当時まだ東京帝国大学の大学院生だった後の中国文学者・久保天随(1875-1934年)が出版した書籍『山水美論』のことで、「雲の真実について」の抄訳が「雲を論ず」と題して収録されていた⁶。久保は、彼がラスキンの「科學的美文」と呼ぶ文章を訳することで、科学を嫌う人々の啓発を目論んだ旨を綴っている。

この先行する久保の本の存在を受けて、藤村は、自身では雲の三分類などのラスキンの論の概略を説明するにとどめ、後は雲の観察をする好適地と発見した信濃で実践した、さながら雲日記のような日々の雲の写生を流麗な文で披露する。藤村は、雲は日本でも古代より土佐の古画、狩野派の山水画、仏画などに描かれてきたし、神社や霊廟の装飾、織物や工芸品の意匠としても使われ、それらには折々に心を惹かれてきたと述べる。しかしこれら芸術を通して雲に興味を感じつつ、知識が無いために空を仰いでもおぼろげな興味を抱くだけだったという。「当時雲烟は知らざる国の言葉もて綴りなしたる詩歌のごとかりしのみ。われはラスキンの通弁を聞いて、初めて心を雲に傾けぬ」と藤村はいう。先にも触れたが日本の絵画のなかの雲はしばしば、それが雲であることが示せればよい、という概念的、記号的な表現であった。そんな風にはんやりと見つめていた雲にも種類と性質があり、個別の識別と描写が可能という、ラスキンのもたらした「科学的」な新概念によって、急に雲の姿にピントが合い、はっきりと見えてきた、というところだったのかもしれない。

当時小諸には欧米から帰国した水彩画家・三宅克己(1874-1954年)が1年ほど滞在していて、随筆の末尾には、彼との話や芸術談義に負うところが大きいとも書かれていた。しかし三宅の自伝では、むしろ三宅側が藤村から教えられるほうだったという⁷。「時にはラスキンのモダン・ペインタア中、自分達に有益の部分の講義なども願ったりした。画家でもない島崎さんが、一冊の手帳に毎日雲の変化など、日記のやうに手記されたのには驚入つて了つた。」「何だか実際、絵を描かれる先輩のやうに思われた。」と述べている。

この随筆が掲載された『天地人』の表紙には「見よ！ 島崎藤村の『雲』」という惹句が大文字で書かれ、文中には空を見上げる青少年の姿を描いた夢二風の挿図【図1】もつけられていた。随筆は翌年刊行された藤村の詩集『落梅集』にも収録された⁸。

このように久保や藤村といった20代の知的エリートが書籍や雑誌で紹介するラスキンの「雲観察」は、単なる美的鑑賞というだけでなく、雲を種類別に分類するなど自然科学的な態度も相俟って、さぞや最先端の



【図1】島崎藤村「雲」掲載時の挿図、『天地人』第40号 1900年8月より転載

趣味に見えたに違いない。日本のラスキンの受容史を精緻に研究された三木はるか氏⁹は、作家の木村莊太(1889-1950年)の「ラスキンの自然描写の洗礼をなら、私は十代の頃に、信濃で島崎藤村氏の書かれていた雲の研究の中でも、間接ながらに、十分すでに受けていた」¹⁰という述懐を紹介されている。画家・木村莊八(1893-1958年)の兄である莊太が十代の時とは1900-1908年頃となるが、早熟な若者らが藤村の随筆を読んでいた様子が窺える。

三木氏はまた、登山家のパイオニアで紀行文作家として知られた小島烏水(1873-1948年)による、「(ラスキンは)今まで自然に対して盲であった人々の眼を開けたのであります。実にラスキンの『近世画家論』の出る前までは、世間一般の人々には、雲の形態の美しさも、山の威厳も、牧場の草の光沢も、知らなかったといふより、見えなかったのであります。」という文章も紹介されているが、ラスキンの論によって雲に眼を開くという感覚は藤村とも似通っている¹¹。これは烏水が1909(明治42)年から翌年にかけて美術雑誌『みずゑ』に連載した「ラスキンの山岳論」の一節だった。

『みずゑ』は、烏水と親交のあった水彩画家・大下藤次郎(1870-1911年)が水彩画専門誌として創刊したもので、これ以前の1907(明治40)年10月にも、霧鷗生なる人物による、「雲」という『近代画家論』の一部の抄訳が掲載されていた¹²。これらを通じラスキンの雲の話はかなりの認知度や広がりをもったことだろう。冒頭の小説『三四郎』が朝日新聞紙上で連載されたのは1908(明治41)年のことだ。主人公・三四郎は慥然としても、この「雲ブーム」を受けて一定数の読者は“雲”と“ラスキン”という言葉で何を意味しているか理解できると、漱石は踏んでいたのだろう。

日本近代絵画の雲の話

さて小説では、“雲”から“ラスキン”の絵画論を連想したとおぼしき野々宮が、「此空を写生したら面白い」と言っているが、では、実際にはラスキンの雲論から、日本の絵画制作への影響はあったのだろうか。これについて先行する研究がある。郡山市立美術館と神奈川県立近代美術で開催された『自然の美・生活の美：ジョン・ラスキンと近代日本展』展(1997年)では、第4章の「ラスキンの自然論と日本」の「雲の研究：東と西」において、ラスキン自身の雲スケッチとともに、亀井竹二郎、浅井忠、武内鶴之助、大下藤次郎、栗原忠二、高木背水、石川欽一郎、山口蓬春という近代の洋画家や日本画家たちの雲を描写した絵画作品が多数紹介されたのだ¹³。近代絵画の雲の描写に対するラスキンからの影響を強く示唆するものだが、残念ながらこの時は、各々の画家との具体的な関連づけと検証はあまりされなかったように見える。

先述したように、近代の日本は、新たに入ってきた西洋絵画の写実技法の摂取に懸命だった時期で、雲の絵がラスキンとは関係なく、単に忠実な風景描写だった可能性もあるだろう。例えば、日本人の洋画家から手ほどきを受け、20世紀になる前に23歳で夭折した亀井竹二郎(1857頃-1879年)のリアルな雲描写は、どちらかということに当てはまるのではないか¹⁴。

逆の場合もある。イギリスにおいて1910-12(明治43-明治45/大正元)年頃に、主にパステルで集中的に雲を描いていた武内鶴之助(1881-1948年)【図2】は、先行研究では、「武内ほど雲をみつめ、雲を描いた画家は例をみない」とされつつ、これらはイギリスでの絵画教育を踏まえた、油彩の風景画制作のための「スタディー」や「パーツ」であるとの位置づけであった¹⁵。しかし横浜に生まれ、1909(明治42)年に横浜正金銀行ロンドン支店副支配人

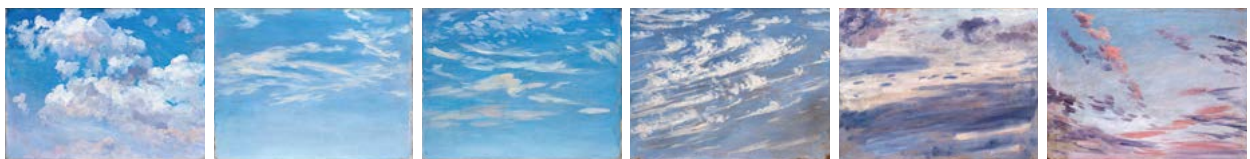
となった兄・金平を頼って渡英した彼の周囲を今回改めて見直すと、日本の「雲ブーム」の関係者が多いことにも気づく。例えば「ラスキンの山岳論」の著者・小島烏水は本名を久太といい、実は兄と同じ横浜正金銀行に勤める銀行員だった(在職1896-1930年)。また最初期に雲論を抄訳した久保天随は小島と横浜の小学校以来の友だった¹⁶。そして武内がイギリスで親交を結ぶのは、再び滞英していた藤村の随筆に登場する画家・三宅克己だ¹⁷。この環境をみると武内は渡英以前に、“雲”と“ラスキン”だけで解する読者の方に属し、その後雲を描き続けたことも、より積極的な意思に基づいたものではないか、つまり日本での「雲ブーム」を受けてのことだったのではないかと思われてくる。



【図2】武内鶴之助《雲》 1910-12(明治43-明治45 / 大正元年) パステル・紙 目黒区美術館

各々の作家について今後の解明を待ちたい。なお展覧会では取り上げられなかったが、近代洋画界を代表する画家の黒田清輝(1866-1924年)も1914-21(大正3-10)年に雲の連作を描いている¹⁸。現在6枚組となっているこの《雲》【図3】も、「雲ブーム」の時期に重なる作品であることを指摘しておきたい。

黒田をめぐっては偶然にも、後に出された興味深い仮説がある。それは黒田が、小説の画工・原口のモデルではないか、というものだ。漱石研究のなかでは、三四郎のモデルは漱石の門下生の小宮豊隆(1884-1966年)¹⁹、野々宮のモデルは先述した寺田寅彦、というのは、ある程度定説だが、小説中でヒロインの肖像を描くなどそれなりに重要な役割を果たす原口には確固たる説はなかった。だが美術史家の新関公子氏が原口の風貌や画風の描写などから特定し²⁰、その後開催された『夏目漱石の美術世界』展(2013年)では古田亮氏がこの説への支持を表明している²¹。黒田の《雲》については最後にもう一度取り上げたい。



【図3】黒田清輝 《雲》 1914-21(大正3-10)年 油彩・板 東京国立博物館 出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

ルーク・ハウードの雲の話

ところで、「雲ブーム」の発端となった『近代画家論』の雲の記述について、いままで国内の先行研究であまり指摘されなかったことがある。そもそもラスキンは、なぜ17世紀の画家たちの雲の描写は間違いで、19世紀のターナーは正確であると断じることができたのか。判断には正しさの指標が必要なはずである。実はこの間に、科学分野において雲の分類と命名という飛躍的な発展があり、彼の論はこの気象学上の重要な発見に依拠しているのだ。

『近代画家論』から先立つこと約40年前の1802(享和2)年の末、イギリスでアマチュアの気象学者であったルーク・ハウード(1772-1864年)が、雲はその形と性質によって大まかに三つの基本的な科に分類できるとし、また4つのラテン語、「巻雲(cirrus)」、「層雲(stratus)」、「積雲(cumulus)」、「乱雲(nimbus)」とその組み合わせを用いて、雲の基本形(雲類)7種類を命名した²²。不定形であいまいなものと思われていた雲には規則性があり、基本形の外見上の特徴さえ押さえれば、見分けるのは容易という新知見は衝撃を与え、翌年に有名な科学雑誌『フィロソフィカル・マガジン(Philosophical Magazine)』にも掲載されヨーロッパ中で大きな反響を巻き起こす²³。ハウードの雲分類は同時代の文学者や画家たちにも影響を与えたと言われ、ドイツの詩人ゲーテ(1749-1832年)も彼に寄せる詩を書いている²⁴。元祖ヨーロッパの「雲ブーム」といえよう。その後、雲の分類は学者たちによって改良を重ねられ、1896(明治29)年には『国際雲図帳(International Cloud Atlas)』が発行され、ハウードの研究をもとにして定められた10種類の雲分類が国際標準となっていく²⁵。

ラスキンの『近代画家論』中で言及される雲の三分類では、上層は「巻雲(cirrus)」、中層は「層雲(stratus)」、下層は「雨雲(rain-cloud)」と、最初のふたつにハワード由来のラテン語が使用されている²⁶。ところで、気象学上、基本的な雲の形態上の三分類は「巻雲」「層雲」「積雲」で、うち「巻」がつく雲は確かに上層にしかないが、「層雲」と「積雲」の名がつく雲はどの層にも存在する。また、雨を降らす性質をもつ「乱雲(nimbus)」は低層だけではなく各層にまたがって存在する²⁷。ラスキンの文には所々で気象学的には誤りがあるが、文中に典拠が示されているわけでもなく、日本の読者には分かりにくかったはずだ。

例えば島崎藤村は1912(明治45/大正元)年に刊行した『千曲川スケッチ』という随筆で、長野観測所の技手の家を訪ねたときのエピソードとして、気象やラスキンの『近代画家論』の文学談義をしたといい、技手の発言として「ラスキンが雲を三層に分けた頃から思うと、九層の分類にまで及んだ近時の雲形の研究は進んだものだ」と、言わせている²⁸。しかし、雲を基本形や高度別に分類するという概念を発明したのはハワードなど気象学者たちで、ハワードは当初から少なくとも雲の分類7種は提唱していたので、藤村はここで事実誤認をしてしまっている。

野々宮君の雲の話

だが、近代日本にもこれら雲に関する情報を正しく理解している人物がいた。外ならぬ「野々宮君」、もといそのモデルの寺田寅彦である。

1919(大正8)年11月15日、寺田は国民美術協会主催の講演会で「雲の話」と題する講演を行っている。その速記の一部は翌1920(大正9)年の『美術月報』8月号に載り²⁹、また死後1936(昭和11)年に刊行された随筆集『橡の實』に全部が収録され³⁰、彼が雲分類やその歴史について正確な知識を持っていることが分かる。

寺田は講演会の冒頭、「何か美術に関係のあることを御話するやうにと云うことで御座いましたが」、自分は専門違いだからと断ったうえで、「雲のことも少しばかりお話して見やうと思ひます」と続ける。このとき漱石は既に他界していたが、理学博士である寺田が、美術に関係することとの命題で雲の話をもちだすあたり、「雲ブーム」の余波を感じないでもない。

この後寺田は科学者らしく自然のなかで雲が形成される過程をくわしく語り、『近代画家論』には気象学的には誤りもあることもさりりと触れる。次に雲の種類の話に移ると、基本の三分類を「巻雲(シーラス)」「層雲(ストラタス)」「積雲(キユムラス)」と正確に述べ、「一千八百餘年頃に、英国のリユーク、ハウアードと云う人が付けた名前」と紹介する。また今日では国際標準の雲分類があることも説明し、これをもとに日本が気象観測法で定めた10種類の雲の形状や色、高度や性質などの説明に移っていく。

ここでそのうちから、一番上層部にある「巻雲」に関する寺田の説明を一部引用したい。

「巻雲は極く高い所にあります、色は白くつて丁度刷毛でなすつたやうな形をしたり或いは羽毛のやうな形をした雲であります」

「非常に形の變化の多い雲でありまして、ターナーが特に此雲を巧く書いて居るといつてラスキンが賞賛して居ります」

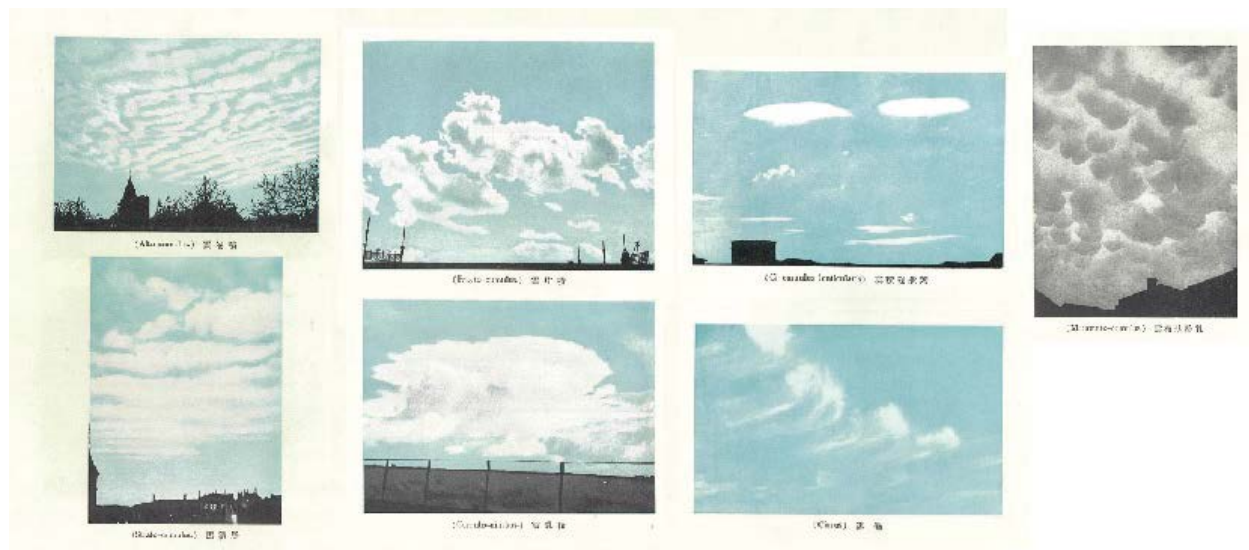
「巻雲と巻層雲とは水滴でなく氷片で出来て居ると考へられる」

以上に照らし合わせると、小説中の三四郎が見上げる「刷毛先で掻き払った痕の様」な「半透明の雲」とは、最上層部にある「巻雲」の一種と推定できる。「あれはみんな、雪の粉ですよ」という野々宮の言葉も、「氷片で出来て居る」ことと符合するからだ。だが実は『近代画家論』では上層の雲は「水蒸気(vapor)」と誤った記述がされており、ラスキンを読んだだけでは「雪の粉」の表現とはならない。これはやはり「野々宮君」の人物造形の背後に現役の科学者・寺田寅彦がいたがゆえの台詞なのだろう。

最後には寺田は科学者の立場からの古今東西の絵画に描かれた雲の評論に移る。例えば平均9千メートルの高さにある「巻雲」を富士山の中腹に描くとおかしい、などその分析は具体的であり、仏画などの概念的抽象的に描

かれた雲、あるいは画中のデザインとして描かれた雲が写実的でないことにも理解を示す美術的教養も窺える。ターナーのことも、複雑な巻雲を巧く描いているが、科学者の眼から見ると「誤魔化しらしいものもない事はありません」と臆さず批評する。そして結語として、雲を注視する画家の割合は少ないので、もう少し雲をよく研究して科学者が見てもおかしくないようにすると同時に芸術的に絵の効果を高める余地がありはしないか、という聴衆の画家らへの激励で講演をしめくくる。

なお講演中、寺田は幻燈(スライド)で雲の種類を見せられなくて残念という旨の発言をしており、話のみで行われたようだ。だが、『美術月報』や随筆集『椽の實』への収録にあたり共通する7種の雲の参考写真【図4】が付された。本稿のために調査したところ、この7枚の写真は、1910(明治43)年にパリで出版された第2版の『国際雲図帳(International Cloud Atlas)』で使用されていたものと同一と判明した³¹。読者に対し、できるだけ正確な気象資料の雲の画像を提示しようとした寺田の努力が偲ばれる³²。だがまさに講演から1カ月後の12月5日、この『美術月報』の校正中、彼は胃潰瘍で吐血し入院してしまうのである³³。



【図4】『椽の實』の挿図より転載、左上より「高積雲」左下「層積雲」、以下「断片積雲」「積乱雲」「茨状巻積雲」「巻雲」「乳房状積雲」(※『椽の實』ではキャプションの雲の名称に一部誤記があるため、各雲名の表記は『美術月報』および原典にも拠った)

黒田清輝の雲の話

さてそんな風に、寺田寅彦がある意味身を削って話した「雲の話」は、奇妙なことに彼がモデルとなった野々宮の「原口にでも話してやろう」の台詞を地で行くことになった。なぜなら、『三四郎』の画工・原口のモデル、かもしれない黒田清輝が聞くことになったからである。結びに、この黒田清輝の雲の絵の話をしてしよう。

黒田が講演を聴講していた理由は、そもそも主催した国民美術協会は、黒田らの肝いりで6年前の1913(大正2)年に美術家のために設立された団体だったからだ³⁴。この年、黒田はその会頭に再選されたばかりだった。そして寺田の講演会の場に臨席していたことは、11月15日付の『黒田清輝日記』に「今夜故岩村男記念講演会催サル 聴衆五六百人アリ 講演者ハ島崎藤村 寺田寅彦 山田耕筰ノ三氏」と書き付けていることから明らかである³⁵。

この時の経緯について、寺田の死後、随筆集『椽の實』の編纂に携わった小宮豊隆は、「大正九年に、黒田清輝さんか誰かから頼まれて、美術家の連中に、雲に関する通俗講演をした事がある。是は恐らく寺田さんの、あとにもさきにも、たつた一つの通俗講演であつたと思はれる」と回想している³⁶。繰り返しになるが小宮は三四郎のモデルとされるので、奇縁にも「雲の話」を巡ってここ

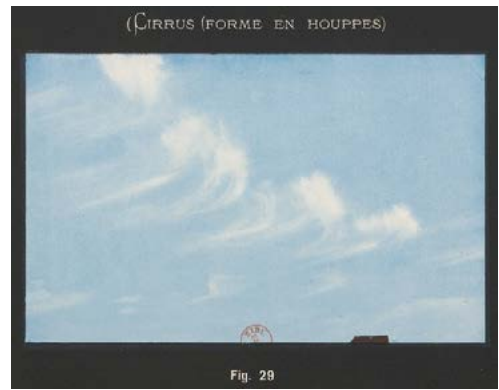


【図5】黒田清輝《雲》(部分) 1914-21(大正3-10)年 油彩・板 東京国立博物館 出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

に三四郎、野々宮、原口の役者が揃う感がある。

もう一度黒田の《雲》【図3】を見てみよう。黒田は1914(大正3)年と1921(大正10)年の日記に雲を描いたことを記録しており、この頃断続的にこの主題に取り組んでいた³⁷。青空や暮れなずむ空を背景に多様な雲の姿をとらえているが、そもそも「雲だけ」をクローズアップした絵画は、日本の美術史のなかでまだ珍しかったはずである。うち一枚【図5】に注目してみたい。絵画から過去の自然現象を特定するのは困難だが、画面に対し、すじかい(斜め)に羽毛状の雲が背景の青を透かすように漂うさまは、寺田が示してみせた『国際雲図帳』の写真【図6】との比較を待つまでもなく、明らかに「巻雲」を描いたものと思われる³⁸。かつてターナーが描くのが巧みとラスキンが讃え、あるいは漱石の小説の中で三四郎

や野々宮が見上げ、寺田が科学的に解説してくれた最上層に浮かぶ雲だ。僅かひと時しか空でその形を留めない大正時代の雲は、黒田の画布上に色彩も鮮やかに固定されて芸術となり、今日までその姿を残す。彼らが繋いできた「雲の話」への黒田なりの応答が、ここに示されているように思えてならない。

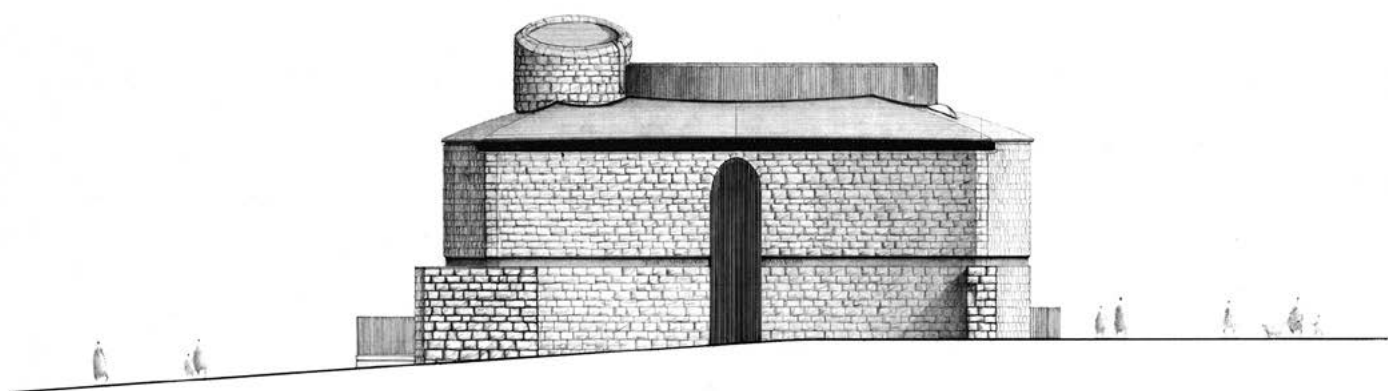


【図6】 *Atlas international des nuages* (2e édition), Paris 1910 (『国際雲図帳』)所蔵先: Bibliothèque nationale de Franceより転載、「巻雲(Cirrus)」の写真

【註】

- 1 夏目漱石「三四郎」『漱石全集』第5巻 岩波書店 1994年 305頁
- 2 夏目漱石「三四郎」『日本近代文学大系26 夏目漱石集Ⅲ』(解説 猪野謙二、注釈 重松泰雄) 角川書店 1972年 70頁 頭注5
- 3 漱石の門下生・小宮豊隆、寺田の門下生・中谷宇吉郎などの証言がある。小宮豊隆「『三四郎』の材料」『漱石・寅彦・三重吉』岩波書店 1942年 106-107頁; 中谷宇吉郎「光線の壓力」の話 ~寅彦先生に關することども『冬の華』岩波書店 1938年 212-222頁(初出:1936年6月 漱石全集月報)
- 4 本稿では以下の版を参照した John Ruskin, *Modern Painters*, vol.1, London: George Allen, 1904, pp.216-281 東北大学附属図書館の漱石文庫から、漱石は同出版社の1898-1902年版の全6巻(vol. 1-5 及び Indexのvol.6)を旧蔵していたと思われる。
- 5 島崎藤村「雲」『天地人』第40号 三才社 1900年8月2日 附録1-17頁
- 6 久保天随「雲を論ず」『山水美論』新声社 1900年5月 18-40頁
- 7 三宅克己『思ひ出づるまま』三宅書房 1936年 126頁
- 8 島崎藤村『落梅集』春陽堂 1901年8月 44-75頁
- 9 三木はるか『近代日本における美術批評家ジョン・ラスキンの受容史(1884~1934年)』(博士論文) 2021年 62-65、71、84-85、92、96頁
- 10 前掲註9 三木、84、96頁および木村莊太「書架のラスキン」『晴耕雨読集』春秋社 1934年 445頁(初出『東京ラスキン協会雑誌』1923年3月)
- 11 前掲註9 三木、176-197、205-206頁および小島烏水「ラスキンの山岳論」『日本アルプス』巻ノ1 前川文栄閣 1910年 72頁(初出『みづゑ』第55号 1909年10月)
- 12 「雲」『みづゑ』第29号 1907年10月 3-4頁
- 13 渡辺俊夫監修『自然の美・生活の美-ジョン・ラスキンと近代日本展』図録(会場:ラスキン・ギャラリー、郡山市立美術館、神奈川県立近代美術館) 1997年 73-74、182-191頁
- 14 『記録する眼: 豊穡の時代: 明治の画家亀井至一、竹二郎兄弟をめぐる人々』展図録 郡山市立美術館 2022年
- 15 山田敦雄「武内鶴之助-眼にうつる風景」『武内鶴之助展: パステルのモノローグ』展図録 目黒区美術館 1993年 72頁、および『日本パステル畫事始め: 武内鶴之助と矢崎千代二、二人の先駆者を中心に』展図録 目黒区美術館 2017年 78、153頁 年表169-173頁

- 16 沼田英子「コレクター小島烏水－東西版画の峰々を極める」『小島烏水版画コレクション 山と文学そして美術』（横浜美術館企画・監修）大修館書店 2007年 6－9頁
- 17 註15前掲図録『日本パステル畫事始め』169頁
- 18 『生誕150年 黒田清輝：日本近代繪畫の巨匠』（編集：東京国立博物館、東京文化財研究所ほか）美術出版社 2016年 254－255頁
- 19 『『三四郎』の正体 夏目漱石と小宮豊隆』展図録 新宿区立漱石山房記念館 2024年 17－18頁
- 20 新関公子『漱石の美術愛』推理ノート』平凡社 1998年 133－139頁
なおモデルに定説はないものの、漱石の門下生・小宮豊隆による、原口の画室の記述は、漱石の本の装丁を手がけていた画家・橋口五葉(1881 - 1921年)のものと類似するという証言はある。註3前掲書『『三四郎』の材料』『漱石・寅彦・三重吉』110頁
- 21 古田亮「夏目漱石の美術世界」『夏目漱石の美術世界』展図録(会場：広島県立美術館、東京藝術大学大学美術館、静岡県立美術館)東京新聞：NHKプロモーション 2013年 26頁
- 22 ルーク・ハワードに関する邦訳評伝は以下を参照した。リチャード・ハンプリン、小田川佳子訳『雲の「発明」：気象学を創ったアマチュア科学者』扶桑社 2007年
- 23 Luke Howard "On the Modifications of Clouds, and on the Principles of their Production, Suspension, and Destruction; being the Substance of an Essay read before the Askesian Society in the Session 1802－3," *The Philosophical Magazine*, vol.16, 1803, London: J. Taylor, pp.344－357, pl.VI－VIII
- 24 註22前掲書『雲の「発明」』236－269頁
- 25 Hugo Hildebrand Hildebrandsson et al., *Atlas international des nuages = International Cloud- Atlas = Internationaler Wolken-Atlas*, Paris: Gauthier-Villars, 1896
- 26 註4前掲書 John Ruskin, *Modern Painters*, vol.1, p.230
- 27 村井昭夫『空の図鑑 雲と空の光の観察ガイド』学研教育出版 2014年 7－10頁
現代の10種の雲形分類は以下
上層：「巻雲」「巻積雲」「巻層雲」
中層：「高積雲」「高層雲」「乱層雲」
下層：「積雲」「層積雲」「層雲」「積乱雲」
※乱層雲は中層に分類されているが上層・下層にも広がる
※積雲、積乱雲は下層に分類されるが中層・上層にも達する場合もある
- 28 島崎藤村「千曲川のスケッチ」『藤村全集』第5巻 筑摩書房 1967年 104頁(初出『千曲川のスケッチ』佐久良書房 1912年12月)
- 29 寺田寅彦「雲の話 一」『美術月報』8月号 204号 1920年8月 2－8頁
- 30 寺田寅彦「雲の話」『橡の實』小山書店 1936年 383－423頁(本書は寺田の筆名である吉村冬彦名義で刊行された)
- 31 Hugo Hildebrand Hildebrandsson et Léon Teisserenc de Bort, *Atlas international des nuages = International Cloud- Atlas = Internationaler Wolken-Atlas* (2e édition), Paris: Gauthier-Villars, 1910 pp.V-VI, X, XII, XIV, figs.10, 12, 19－20, 24, 27, 29
- 32 寺田の「雲の話」の効果か、この後刊行された石井正雄訳によるラスキンの雲論には、「国際雲級」の分類とラスキンの分類が異なることや、ルーク・ハワードや寺田寅彦の情報に関しても注釈がつけられ気象学的な正確さが目指されている。ラスキン、石井正雄訳「雲」『絵画論』第一書房 1940年 83－85頁
- 33 寺田寅彦「病中記」『寺田寅彦全集』文学篇 第1巻 岩波書店 1936年 320－321頁
- 34 註18前掲書『生誕150年 黒田清輝』292頁
- 35 『黒田清輝日記』第4巻 中央公論美術出版 1968年 1302頁
- 36 註30前掲書 小宮豊隆「『橡の實』のはじめに」『橡の實』3、19頁
- 37 註18前掲書『生誕150年 黒田清輝』254－255頁
- 38 註29前掲書『美術月報』8頁 図版「巻雲(Cirrus)」および 註31前掲書 *Atlas international des nuages* (2e édition), p.XIV, fig.29 “Cirrus (forme en houppes)”



《渋谷区立松濤美術館 立面図》白井晟一研究所蔵